

中野市安源寺遺跡発掘調査報告

安源寺

III

1987. 3

長野県中野市教育委員会

中野市安源寺遺跡発掘調査報告

安源寺

III

1987. 3

長野県中野市教育委員会

序

安源寺遺跡は、市の西部丘陵上の安源寺集落付近にあり、中心は小内八幡神社裏の丘陵の南斜面にあたります。遺跡は旧石器から近世にかけての複合遺跡です。

このたび、県営畑地帯総合土地改良事業に伴い8月に第1次、10月に第2次発掘調査を実施致しました。

調査は、日本考古学協会員・中野市文化財保護審議会議長金井汲次先生を団長に、調査主任榎原長則氏・調査員池田実男氏にお願いするとともに、地域の大勢の方々のご協力を得て実施しました。

今回の調査によって、縄文時代中期のものと思われ、中野市では初めての人面土器・北信初見といわれる手焙形土器・S字口縁をもつ台付変形土器等、その他多くの貴重な土器が出土しました。

残暑の中、長期にわたる調査になりましたが、安源寺区をはじめ、御協力を賜りました方々、また報告書作成に御苦勞をいただきました調査団の皆様、心から感謝と御礼を申し上げます。

昭和62年3月

中野市教育委員会

教育長 嶋田春三

例 言

- 1 本書は、中野市教育委員会と北信土地改良事務所との契約にもとづいて、市教育委員会の編成した調査団によって行われた県営畑地帯総合土地改良事業（畑灌）地内（工事予定面積 200,000 m^2 、調査予定面積 501.2 m^2 ）の埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査にあたり、地元安源寺区を初め、地主の皆様、北信土地改良事務所、工事担当の中野興業KK、市役所各主管課から多くの援助をいただいた。
- 3 本文中の遺構記号はSB-住居址、SD-溝状遺構、SK-土壇を表す。
- 4 SD3、SB14の遺構図は水系方眼による1/5作図、その他は平板測量による1/10乃至1/20の実測図を1/4に縮図して掲載した。また全体図は、「中野市現況平面図 3・14・26」1/500を使用し、実測図より転載し、1/2に縮図した。
- 5 土器、石器等の遺物は現寸大、大部分は1/3、1/4の縮図とし、小形の遺物は1/2を用いた。
- 6 本書に関する写真撮影は、主として徳竹雅之、榎原長則によるものである。
- 7 資料整理は調査団全員の協力によって行われ、主として復元は榎原、池田実男が、実測は榎原、徳竹、トレースは栗原よしみ、山崎のり子が分担した。
- 8 報告書の作成に当って、榎原健、笹沢浩両先生の指導をいただいた。但し執筆の文責は執筆者にあり、氏名は文末に記した。
- 9 調査の実測図・写真・遺物等は、中野市歴史民俗資料館で保管している。

目 次

序

例 言	
目 次	
挿 図 目 次	
表 目 次	
図 版 目 次	

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査日誌	1
第3節 調査団の編成	4
第4節 調査の計画及び内容	5

第Ⅱ章 調査地周辺の環境

第1節 遺跡の立地と歴史的環境	6
第2節 層序	6
第3節 研究史概説	8

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 遺構について	11
第2節 遺構・遺物の分布状態	11
第3節 弥生時代の遺構と遺物	15
第4節 古墳時代の遺構と遺物	25
第5節 平安時代とそれ以降の遺構と遺物	49

第Ⅳ章 考 察

第1節 縄文時代の遺物について	53
第2節 弥生時代の遺物について	59
第3節 古墳時代(十節第Ⅰ期)の遺物について	63

第Ⅴ章 結 語

参考文献	72
------	----

挿 図 目 次

第1図	調査川	4
第2図	周辺遺跡分布図	7
第3図	遺跡全体図(折り込み)	13
第4図	SB1遺構	15
第5図	SB2遺構	16
第6図	SB4遺構	16
第7図	SB6遺構	17
第8図	SB7遺構	17
第9図	SB10遺構	18
第10図	SB11遺構	18
第11図	SB12遺構	19
第12図	SB13遺構	19・20
第13図	SB15遺構	20
第14図	SB18遺構・出土遺物	21・22
第15図	SB20遺構	22・23
第16図	SD3遺構	23
第17図	SD10遺構	24
第18図	SK4遺構	25
第19図	SB3遺構・出土遺物	26
第20図	SB5遺構	27
第21図	SB8遺構	27・28
第22図	SB9遺構	28・29
第23図	SB19遺構	29
第24図	SB21遺構	30
第25図	SD1遺構・出土遺物	31
第26図	SD2遺構・出土遺物	32~35
第27図	SD4遺構・出土遺物	36・37
第28図	SD5遺構・出土遺物	37~39
第29図	SD6遺構・出土遺物	40・41
第30図	SD7遺構・出土遺物	41・42
第31図	SD8遺構・出土遺物	43・44
第32図	SD9遺構・出土遺物	44・45
第33図	SK1遺構	46
第34図	SK2遺構	46・47

第35図	SK3遺構	47
第36図	SK5遺構	48
第37図	SK6遺構	48
第38図	SB14遺構・出土遺物	49・50
第39図	SB16遺構	51
第40図	SB17遺構・出土遺物	52
第41図	縄文時代土器拓影図	54・55
第42図	打製石斧実測図	57
第43図	石器・硬玉未製品実測図	58
第44図	弥生土器・須恵器拓影図	60

表 目 次

第1表	土層識別表	8
第2表	縄文土器・弥生土器・須恵器観察表	74~76
第3表	土器観察表	77~80
第4表	遺構検出表	80
第5表	弥生時代後期から古墳時代前期の編年表	81

図 版 目 次

図版1	1遺跡全景 2SD2 3SD8	85
図版2	1~3SD2 4・5手埴り形土器 6中世羽口	86
図版3	1S字口縁壺破片 2蓋形土器 3~6甕形土器	87
図版4	1・3埴形土器 2汙口形土器 4甕形土器 5・6壺形土器	88
図版5	1甕形土器破片 2・4単純口縁台付甕 3・5S字口縁台付甕	89
図版6	1・3埴形土器 2手づくね形土器 4~6甕形土器	90
図版7	1小形単純口縁台付甕 2・5直口縁埴形土器 3高坏脚部片 4大形甕形土器	91
図版8	1・3~7小形器台形土器 2小形丸底甕形土器 8甕形土器	92
図版9	1・5高坏坏部破片 2裝飾器台形土器破片 3器台形土器 4小形高坏形土器破片 6・9高坏坏部破片 7・8・10高坏形土器	93
図版10	1蓋形土器 2・4・5甕形土器口縁部破片 6甕形土器口縁部破片 7大形甕形土器破片 8甕形土器 9灰粘広口甕破片	94
図版11	1栗林式壺破片 2吉田式壺破片 3吉田式甕破片 4硬玉未製品 5人面土器破片 6土偶破片	95

第 I 章 調査の経過

第 1 節 発掘調査に至るまでの経過

当市の農業はりんご・ぶどう・アスパラガス・エノキダケ等々に、農家自ら常に新たな栽培技術を生み出し、農業の先進的経営で全国に広く知られている地帯である。

畑作の大半を占める果樹、アスパラガス栽培は自然に大きく左右されることから、干ばつ防止で経営安定をはかるため畑地かんがい事業が以前から進められ大きな成果を上げている。

西部丘陵地帯でもこの計画が取り上げられ、昭和 54 年から東営中野西部地区土地改良事業の畑地帯総合土地改良事業として実施されており、昭和 61 年には、過去数回の発掘調査で貴重な遺構・遺物が出土している安源寺遺跡地内でも施工されることになった。

昭和 60 年 10 月 15 日付で事業主体である北信土地改良事務所中野支所長から、事業施工に伴うこの遺跡保護について協議書が提出され、10 月 21 日関係者立合いのもとに現地協議を行った結果、工事施工の前に発掘調査を実施し記録保存をはかることになった。

発掘調査は中野市教育委員会が事業主体から委託を受け、国・県の補助事業として調査を行うことになった。

昭和 61 年 7 月 21 日委託契約を締結し、総延長 716 m、延面積 501 m²について 7 月 28 日から 11 月 29 日の間に現地調査を行うことで発掘通知等必要な手続きを完了した。

この調査は工事の工法と遺構破壊を最小限に止める目的から、配管工事が行われる幅員が地面で 70 cm、底面で 50 cm、深さ 80 cm の範囲内に限っての発掘調査とする当市では初の調査方法となった。しかもりんご、ぶどう、アスパラガスといった作物の栽培、収穫になるべく影響を与えないように配慮したそれぞれ時期を選んでの調査である。

7 月 24 日に調査団の編成を行い、関係地主への説明会を開いて意見調整調査への協力と理解を求め、また地元安源寺区長ほか関係者に発掘作業への協力を要請し、7 月 28 日から発掘調査を開始することになった。

(小野沢 捷)

第 2 節 調査日誌

- 8 月 1 日 晴 安源寺小内八幡神社本殿脇にテントを設営し、発掘機材を搬入する。
- 8 月 2 日 晴 事業主体並びに土地所有者の列席のもと調査団による結閉式を行った後、A 地区よりグリットを設定し、A-1 及び A-2 のグリットより掘り下げを開始する。A-1・5~6、A-1-12、A-2-1 グリットそれぞれ

より弥生後期の土器が出土する。

- 8月3日 晴 前日からの掘り下げを継続。A-1トレンチの掘り下げを完了し、清掃の後記録写真の撮影。A-1トレンチの一部埋め戻しを始める。
- 8月5日 曇 精査のため、A-1-5～6グリットを拡張し、A-1-6～7グリットより落ち込みを確認する。並行して、バックホーによりA-3、A-4、A-5トレンチの表上剥ぎを開始する。A-2-1グリット検出の土器集積を実測し取り上げて下層を精査したところ、落ち込みを確認する。A-1トレンチのセクション及びエレベーションの実測を完了する。
- 8月6日 曇 A-1-5～6地区の写真撮影を終了し、A-1トレンチの埋め戻しを完了する。A-2-1グリット検出の落ち込みより、高坏脚部2、器台1が、またA-2-6より羽口1がそれぞれ出土する。A-4-1～2、A-5-4・7よりそれぞれ落ち込みを確認する。
- 8月7日 曇後晴 A-2-1～2・4～6、A-4-1～2グリットのセクション実測と写真撮影を完了する。A-3-3グリットより落ち込みを確認し掘り下げ、埴形土器、高坏、壺等多量の土器集積を検出し、精査する。またA-3-7より縄文中期土器片が出土する。
- 8月8日 晴 A-5-1・5平板測量、A-3-1通りセクション実測完了する。
- 8月9日 晴 A-5-3・6のセクション実測を行う。A-3-8・9およびA-5-7ともに10分の1の平板測量を行う。
- 8月11日 晴 B-1、B-2トレンチの掘り下げを開始する。A-3-3グリット検出遺構の実測を行う。A-8-2～3より落ち込みを確認精査する。A-8-5・6を10分の1平板測量を行う。
- 8月12日 晴 A-11トレンチの掘り下げを開始する。A-3-3、A-8-2～3、A-9-1～8グリット検出遺構の実測写真撮影を完了する。A-9-9グリットからA-10トレンチにかけて、掘り下げ精査したが、遺物・遺構検出されなかったため、写真撮影の後埋め戻す。B-1-1より落ち込み、B-2-6より小鍛冶址遺構を検出、それぞれ精査を継続する。
- 8月13日 晴 A-3-3グリット出土の土器を取り上げる。A-8-1・3～4グリットのセクションの実測写真撮影を完了し、埋め戻しを行う。B-3-3グリット出土の土器の取り上げを行う。A-9-2・5、10分の1平板測量を行う。
- 8月14日 晴 A-3-2～3写真撮影前の清掃作業を行う。A-9-3～4の10分の1平板測量終わる。A-9-5～6グリットのセクション実測が完了する。
- 8月15日 晴 A-2-3、A-9-7～8、A-11-10等10分の1平板測量、A-9-4のセクション実測、A-11-9、B-1-1、A-6、A-7各トレ

ンチ掘り上げ、清掃後写真撮影完了。

- 8月18日 晴 A-6-7の10分の1平板測量、A-6-8、A-11-7~8、A-11-9等10分の1のセクション実測完了。
- 8月19日 曇のち晴 A-11-2~5 平板測量完了。B-4トレンチ及びB-1-1~5 写真撮影完了。
- 8月20日 晴 A-11-7の10分の1平板測量、A-11-3 セクション実測、B-2-5-7、B-4-6-7-9掘り上げ後写真撮影完了。
- 8月21日 晴 A-11-8の10分の1平板測量、B-1-1、B-10-2、B-9-8-10掘り上げ後清掃写真撮影完了。
- 8月22日 晴 B-10-2~3の10分の1平板測量、B-3-3、B-3-6、B-8-1-3等清掃後写真撮影完了。
- 8月25日 晴 B地区セクション実測及び平板測量、写真撮影した箇所より埋め戻し作業に入る。
- 8月26日 晴 B地区、B-1-1~B-10-4までの100分の1の全体平板測量に入る。B-1-1、B-2-5掘り上げ後写真撮影完了。
- 8月27日 晴 新聞社が取材に見える。昨日に引きつづいて100分の1の平板測量続行。
- 8月28日 晴 平板測量B-1-1~B-10-4までの100分の1全体測量完了、午後にはテント取りはずし、機材の搬出作業を行い、第1次調査を終了する。
- 10月23日 小雨後曇 本日より第2次調査を開始する。まずBXTレンチのグリット設定、バックホーによる掘り上げ後精査。
- 10月24日 晴 昨日につづいて遺構確認作業。
- 10月27日 晴 BX地点掘り上がり清掃後写真撮影。BX2-5、BX-7-11の20分の1平板測量、セクション実測に入る。
- 10月28日 晴 前日に引き続き、20分の1平板測量。写真撮影等完了BY-BZ地区へ移る。
- 10月29日 曇 BY-5、BZ-1-12まで遺構確認のため掘り下げ精査する。
- 10月30日 晴 前日に引き続いてBY-5掘り下げて精査する。
- 10月31日 晴 BY4~5遺構確認し精査。
- 11月1日 晴後曇 BY-1~3・BY4~5・BY11~16の20分の1平板測量完了。
- 11月5日 曇 BY11~15セクション実測、BY22~26の20分の1平板測量完了。BZ2-4-5、BY12-14写真撮影を行う。100分の1平板測量開始する。
- 11月6日 晴 BY15~18セクション実測、20分の1平板測量完了。BZ・BY地区の100分の1全体実測継続。
- 11月7日 曇 BY・BZ地区の全体測量完了、機材の搬出を開始する。
- 12月~3月 整理作業、報告書作成 (徳竹雅之)

第3節 調査団の編成

- 調査責任者 嶋田春三（教育長）
調査団長 金井汲次（日本考古学協会員・中野市文化財保護審議会会長）
調査主任 檀原長則（日本考古学協会員）
調査員 池田実男（長野県考古学協会員）
事務局 酢谷康雄（社会教育課長）
小野沢捷（同 歴史民俗資料館管理係長・県考古学協会員）
徳竹雅之（同 学芸員・県考古学協会員）
- 協力団体 安源寺区
参加者 古田 茂、田川照生、山上嘉一、阿藤英奈、金井英男、藤沢英夫、阿藤仁子、
関 武、小林律子、関 純子、小林あけみ、黒岩七花、渡辺裕子、山田多恵、
山本 勝、望月昭二、徳竹佐織、鈴木亜矢子、小野沢標子、小林利枝、藤沢高
広、阿藤美紀、上野孝典、山本博康、渡辺金治、阿藤きみ、阿藤千代江、栗原
よしみ、三井博茂、大原 勇、馬場恒夫、小野沢時子、山崎のり子、池田ひさ
い、渡辺光代、関 正子

本調査にあたっては、宮島俊男安源寺区長、地主各位、小林昭八氏、工事請負の中野興業
株、土地改良区の皆様には格別のご配慮をいただき、また調査参加者には鋭意協力を賜り、
大きな成果をもって完了できたことを記して感謝申し上げる次第である。（小野沢捷）



第1図 調査団

第4節 調査の計画及び内容

今回の調査は、先述の如く畑地灌漑事業実施に伴うもので、台地上の夏の寡雨地帯の生産力増加を願う給水パイプ埋設とスプリンクラー設置に伴うもので、県下でもあまり調査例を聞かず、稠密な遺構の存在する複合遺跡での次善の調査方法で、調査時にも、研究者の探究心と相克する場面が多かった。

調査は、果樹園の中にスプリンクラーを設置する配水管埋設の計画図面にもとづいて行ったが、樹間のため、曲折は免れなかったし、夏の生育時のため、早急に埋戻し作業に入る必要があったが、これは、園地所有者の方々の御理解があり、トラブルはなかった。

このように地上幅70cm、地底幅50cm、深さ80cmを掘削断面即ち調査坑の範囲ということになる。従ってこれ以上の遺構の性格を究明することは制約上できず、不本意な結果を生じることとなり、場合によっては、遺構の破壊に終わってしまうことが杞憂される場面があった。だが、遺物の面からみると、重機で、粉碎されてしまうところを多くの新知見の資料が検出されたし、推定される遺構とのかかわりも究明できたので、今後の研究資料として活用される場面が多かろうと思われる。また調査が、広範囲に亘って行われたので、分布調査的性格もあり、今後の遺跡保護に活用が期待される。

(檀原長則)

第II章 調査地周辺の環境

第1節 遺跡の立地と歴史的環境

安源寺遺跡は、南に草間丘陵と北には片塩丘陵が連なる中間にあって、地字は石原・宮裏・立道・峯・清水にまたがり、式内社に比定される小内八幡神社を中心に旧石器時代から近世におよぶ一大複合遺跡で、範囲は約2.4 km²にある。標高凡そ350 mの亀の背状台地で、北には山地が横たわって北風を防ぎ、東南は開けて日当たりが良く、春の融雪は、この地域では10日ほど早い。また、台地の中腹には湧泉があって、地名も清水と呼ばれ、生活の舞台としては好条件の場所である。

東南の比低差40 mには、千曲川によって形成された後背低湿地の中野平（通称延徳田圃）の肥沃な水田農耕地帯が展開している。

高丘陵は埋蔵文化財の宝庫で、(1)旧石器時代には立ヶ花表・浜津ヶ池遺跡があり、各地から遺物の単独出土が知られている。

(2)縄文前期では立ヶ花遺跡、中期には安源寺・姥ヶ沢・宮反遺跡は著名であり、土偶が多量に出土した姥ヶ沢遺跡は学界から注目されている。

(3)弥生中期の栗林遺跡は県史跡に昭和35年2月11日に指定されている。また、最近の調査によって立ヶ花・草間・安源寺にも中期の遺構・遺物が発見されている。弥生後期は、本遺跡が善光寺平北端の最大遺跡として注目され、周辺の風巻・草間高屋敷・草間中組・立ヶ花・栗林遺跡へと広まりをみせている。

(4)古墳は、小丸山・白山姫神社・立ヶ花(1～3号)・京塚・西山御嶽山・射軍神・高山(1～2号)があり、古墳時代の遺構・遺物は各地に多い。

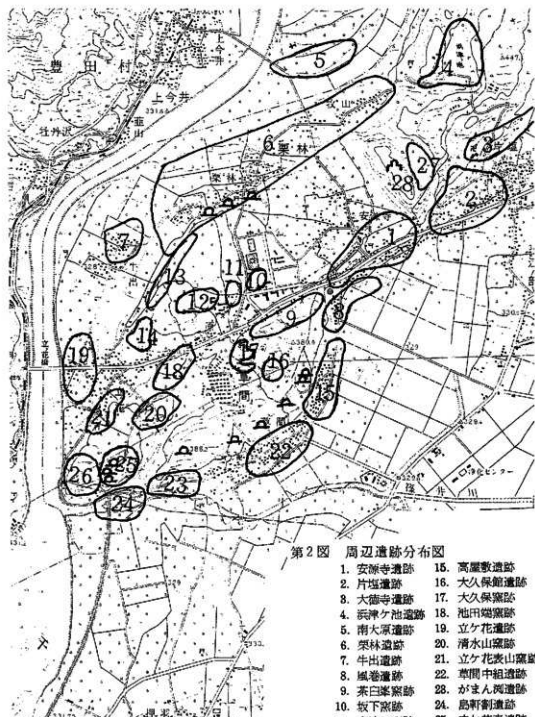
(5)古窯址(8世紀前後)は草間・立ヶ花・牛出・栗林・安源寺の各地の傾斜地にあって、60基余をかぞえる。

(6)中世の居館址は安源寺・牛出・草間(2)、山城は安源寺・立ヶ花、砦址は茶臼峯(草間)等があって、戦国期の遺物の出土例が多い。(金井汲次)

第2節 層序

今回の発掘調査は灌漑用送水パイプ埋設に伴う調査で、深さは80 cmと限定されていたが、層序は比較的明確に分別することができた。

各グリットともに共通の層序は第1表のI～Ⅵであり、以下は洪積世の平出層、巻野層、



第2図 周辺遺跡分布図

- | | |
|------------|-------------|
| 1. 安源寺遺跡 | 15. 高麗敷遺跡 |
| 2. 片塩遺跡 | 16. 大久保館遺跡 |
| 3. 大徳寺遺跡 | 17. 大久保窯跡 |
| 4. 浜津ヶ池遺跡 | 18. 池田堀窯跡 |
| 5. 雨大塚遺跡 | 19. 立ヶ花遺跡 |
| 6. 栄林遺跡 | 20. 清水山窯跡 |
| 7. 牛出遺跡 | 21. 立ヶ花表山窯跡 |
| 8. 風巻遺跡 | 22. 草間中組遺跡 |
| 9. 茶臼塚窯跡 | 23. がまん洞遺跡 |
| 10. 坂下窯跡 | 24. 鳥軒割遺跡 |
| 11. 東池口窯跡 | 25. 立ヶ花表遺跡 |
| 12. 中原窯跡 | 26. 立ヶ花城跡 |
| 13. 牛出窯跡 | 27. から池遺跡 |
| 14. 草間西原窯跡 | 28. 安源寺城跡 |

1:25,000 中野西部

0 500 1000 1500

層位	
I	表土(耕作土)
II	黄黒褐色土
III	黒色土(木炭含有)
IV	黄茶色土(木炭含有)
V	茶色土
VI	黒褐色土
VII	灰黒色土
VIII	褐色土
IX	黄褐色土
X	黄色土
XI	ローム(地山)
XII	茶褐色土

第1表 土層識別表

ある。B地区の代表例として、グリットB-1-1の層序の厚さは、第I層7~17cm、第II層10~26cm、第III層(遺物包含層)2~90cm、以下はローム層であった。(池田実男)

第3節 研究史概説

安源寺遺跡は古くから表探遺物の多いことが知られており、大正初期に編纂された『高丘村誌』、大正11(1922)年刊の『下高井郡誌』に記載されている。

昭和14年には神田五六氏によって「下高井郡先史時代遺物発見地名並所蔵者表」がまとめられた。この中で長丘丘陵では安源寺・栗林など6ヶ所の先史時代遺物発見地名が掲載されている。

戦後もない昭和23(1948)年には下高井教育会小野勝年氏等によって、当地では初めての本格的学術調査が厚貝山の神古墳・田麦林畔2号墳、栗林遺跡において実施された。これらの成果は5年後の28年に、県教委によって「下高井」として刊行された。この中で本遺跡をもとりあげ遺物の実測図・写真をも合せて掲載し、縄文~弥生~土師に亘る一大複合遺跡であると記されている。

本遺跡に初めて発掘の機会が訪れたのは昭和26(1951)年のことであった。高丘小学校が主催し、神田氏を指導者、田川幸生氏を担当者として10月5日より11日の1週間にかけて発掘調査が実施された。この第1次調査は宮裏地籍において行われ、弥生時代後期の住居址と土城墓を検出し、多量の土器・石器が発掘された。田川氏はこの成果を桐原健氏とともに「長野県安源寺遺跡の弥生式土器」(『信濃』14の4 1962)として発表された。

屋敷層、大川層となる。なお、本報告書では層序を左記に掲げた表に準ずるものである。

(A地区の七層)

小内八幡宮本殿東側より、グリットA-8-1まで直線距離で約80mである。南西に緩やかな傾斜地で、グリットA-9-1からグリットA-8-1までの標高差は約4mである。

A地区の代表例として、グリットA-3-3の層序の厚さは、第I層11~21cm、第II層5~26cm、第III層4~49cm、第IV層2~6cm、第V層2~6cm、第VI層13~15cm、第VII層遺物包含層25~27cm、以下はローム層である。

(B地区の土層)

調査地一部を除いて南東に傾斜する段状の畑地で、大部分りが植栽されている。グリットZ1地点よりグリットB-7-1までは、直線距離で約100m離れており標高差は6.5mで

第2次発掘調査は県道中野～豊野線の道路付替工事にともない、昭和41(1966)年5月～6月に金井汲次氏を調査団長として、中野市教育委員会が実施した。第2次調査では弥生時代の土塚墓群23基・平安時代の住居址の一部を検出した。その他中世の土塚墓2、火葬墓12、近世の土葬墓2を発掘した。また、宮裏の須恵器窯址を完掘し、トンネル式無段登窯であることを確認した。遺物では旧石器時代の石器・石屑、縄文時代前・中期・弥生時代中・後期の上器・石器・土製品、須恵器・布目瓦・古銭・播鉢片・人骨等が出土した。

第3次調査は宗教法人平和教会が、宮裏の畑地に修行殿を建設することにもなって、昭和51(1976)年11～12月に金井汲次氏を調査団長に実施された。3次調査では弥生時代後期(箱清水期)の住居址4・土塚墓3・古代の住居址4・土塚墓3が検出された。また土師窯址などが発掘された。遺物では旧石器時代の黒曜石製石器、縄文時代前期から中期の土器、弥生時代中期後半～後期(箱清水式)の土器が多量に出土した。

以上、3次にわたって行われた発掘調査では、先上器から平安・中世・近世に及ぶ一穴複合遺跡であることが確認された。そして、その主体は弥生時代後期・古墳時代前期と平安時代である。弥生時代の遺構・遺物については、住居址・土塚墓に各種の遺物がセットで検出され、前期の栗林式・後期の箱清水式の上器片が多量に出土した。千曲川流域に広く分布する箱清水文化の究明の鍵を握る貴重な資料として注目された。

第2次調査で検出された4軒の住居址のうちの1戸は、鍛冶址であった。古代の集落構造、生産関係を知る上で重要なものである。検出された半地下式平窯は、土師器を焼成したものであり、新井大ロフ遺跡和泉式(新)の土器群と近似している。後にこの調査で、注目されたのは、Y3号住居西側(F・G2～3)より検出された土器群で、この時は、住居址のプランが確認されていないが、弥生時代から古墳時代に変革する画期の土器として注目され(後述)これを「H・A号址」と呼称したい。

3次にわたる発掘調査以後も、住宅の改築・増築にともなう小規模な発掘調査がつつづけられている。昭和59(1984)年には小林昭八氏宅地(栗林期の凹形住居址・完形上器3)、60(1985)年には、小林準氏宅地(箱清水期後葉住居址・ソロバン玉状の付合壺形土器)、61(1986)年には藤沢安匡氏宅の調査がおこなわれたが、遺構の検出はなかった。

さて、昭和41年調査の報告書が刊行されるや、その文化内容が、特に北陸方面からの影響が注目され、大規模開発の進展とともに論考が増加してくる。さきに桐原氏は、昭和36年、飯山市御町遺跡の報告書において弥生後期末に柳町式を加え、箱清水式をⅠ式・Ⅱ式に細分している。その後、同氏は安源寺遺跡出土資料を用いて従来の尾崎・箱清水式をまとめて、箱清水式とし、安源寺2類を箱清水Ⅰ式と同3類を箱清水Ⅱ式に比定した。(『安源寺』Ⅰ所収) このように安源寺遺跡は、箱清水式文化のキーポイントを握る遺跡と位置づけられている。これに対し笹沢浩氏の反論があり、桐原氏は、安源寺遺跡の形式概念を訂正し、箱清水Ⅰ式に安源寺3類を箱清水Ⅱ式を生仁遺跡Y8写址及び、北長野国鉄貨物基地出土土器

を比定した。(一志茂樹博士喜寿記念論文集) このような地域差は、相対年代差とするか論議されたが、遺構検出の一括資料に恵まれない結果だともいえる。その後、桐原健氏、「信越国境間交流についての考古学的所見」信濃Ⅲ・32-12において、安源寺遺跡出土の北陸系(主として東北部)の問題をとりあげている。同年、太田文雄氏は「北信濃の弥生後期編年について—田草川尻遺跡出土土器を中心として—」信濃Ⅲ32-4で1・2号住出土土器を田草川尻第1期=後期前葉に同3号住出土土器を同第2期=後期中葉とする編年案を提示した。昭和56(1981)年には、中野市誌が発刊され、田川幸生氏が過去の調査を集大成している。昭和58(1983)年には、県史考古編纂事業として、安源寺遺跡出土土器の再実測が実施され、その論考は、星龍象ほか「信濃の弥生式土器から土師式土器への変遷過程(一)・(二)」信濃Ⅲ35-5・7とし発表され、安源寺遺跡の箱清水式、古式土師器(HA号址出土)に詳細な分析を加えてその出自を検討され、北陸外来系土器が注目された。翌年、『県史考古資料編』が刊行され、栗林遺跡とともに安源寺遺跡も解説されている。

昭和59年に千曲川水系古代文化研究所ほかの主催により第5回三県シンポジウム「古墳出現期の地域性」が上山田町で開催され、そこで坂井秀弥氏は、安源寺遺跡の当刻期の土器について県史資料(主として第3次調査のHA号址出土土器)に基づいてその出自を明らかにしている。昭和61年には、笹沢浩氏「箱清水式土器の文化圏と小地域」歴史手帖2昭61で、折り返し口縁をもつ千曲川下流域に多い壺形土器を「飯山形」と呼称している。同誌に花岡弘氏も「土師器の成立と古墳時代」を発表し安源寺遺跡出土土器を解説資料として用いている。以上、安源寺遺跡が、弥生文化・古式土師器研究の県下での分野で如何に注目されてきたかを物語る研究史を管見にふれた資料で概説した。

(注) 第3次調査時の古式土師器出土地点に県史と報告書の記載に錯誤がみられる。報告書を尊重してH・A号址と呼ぶことを提唱したい。なお、星龍象ほか論文参照されたい。

(榎原長則)

第三章 遺構と遺物

第1節 遺構について

遺構は、一定の場所における遺物の集合である堆積と、過去の人々が大地を加工した痕跡である坑と、大地の上に設置した構築物とに大別される。^(A) これらの遺構は、井戸、竪穴住居、柱穴、埋葬穴、ゴミ捨て穴、溝等に大別されるが、先に記された如く今回の調査は研究者にとっては、次善の策と考えられる調査方法であるが、本遺跡においても、他の同時期遺跡と同様、多数の土坑や溝状遺構が存在することが認められた。このような調査方式だと、以下に記す遺構分類も確率の低いものになってしまう点がおそれられる。

SD2、SD5の如き溝状遺構は最下層より検出された土器の時期が、溝が設けられた時期と一致すると考えられ、混在した土器に縄文中期や、箱清水期の土器がみられたが、勿論、流れ込みによるもので、細片化しており、また主体をなす土器片の1時期先行すると思われるものも、器面の剥離や、破損状態が著しく、これらを除いた古式土師は、ほぼ同時期の所産と認定されるものである。 (A) 山本忠尚 「調査技術論」 岩波講座『日本考古学』1 1986

第2節 遺構遺物の分布状態

(1) 縄文時代

この時代の土器片は、今回の調査によると他の時代の土器片の検出された所には、必ず僅か見出され、丘上部全体に広がっていると思われ、特に人面土器片の検出されたBY・Z地区に、中期前葉の上器が、やや集中して検出され、またSD3、SD5の溝状遺構に縄年代の違う土器と混在して検出された。層位は、むしろ上層から検出されるものが多く、複合遺跡の宿命で後世の人々の攪乱によるものと考えられ、前述の如く調査方法が限定されたものだったが、刻期の遺構—住居址—などは検出されなかった。これは昭和41年の調査時(報告者 関孝一)や、昭和51年の調査(報告者 金井波次)の傾向と一致するものである。

(2) 弥生時代以後

中期後半の時期からで、この時期のものも散在しているが、昭和41年調査時には、発掘区の東半部に刻期、栗林式の土器の分布を認める⁽⁶⁾と記されている。51年調査時もK16附近より集中して発見されている。また昭和60年調査時(小林昭八氏宅地)は、完形の小形変形、壺形土器などが検出され、円形を呈する住居址半分が検出されている。今回の調査では、B3～B4(SB17)で住居址が確認されたが、時期は中期末葉と考えられてい

る。その他破片がやや顕著に認められた所は、BYトレンチ(SB20)付近である。後期の箱清水式に属する土器は、調査区全体から満遍なく検出され、量的には多量であるが細片で接合できていない。刻期の住居遺構は、第3次発掘の所見をみると、3基の住居址間は、 $16 = 175 = 20$ ㍓の空間を有している。今回の調査のA地区も、ほぼ同様の住居群を有していると思われる。昭和60年調査時は、小林準氏宅地で住居址1軒が検出されている。この期以後、関東の五領式併行までの土器が連続として、古式土師器のあり方を追求する好資料を今迄、学会に提供してきた。この時期は、A地区、B地区のBX、BY、BZの調査区に広がっており、51年調査区にもH・A号址から古式土師器が検出されており遺構の広がりを知ることができる。またこの期の特徴は、溝状遺構が9カ所程、検出されたことである。そして関東編年五領期と思われる器台がSD1から検出されているが、以後国分期までの土師器は断絶し、調査区ではB-2以東の東寄りの地区から、鍛冶址、住居址2軒などが検出されており、B-4では須恵器破片と国分期の土器が検出されているが、ここはやや傾斜面で、41年の須恵窯址に近いから窯址も存在するかも知れず、下段には湧水が存在する。また昭和26年調査時には、刻期の土器片、41年の調査時には、住居址1軒、51年調査時は、4軒の住居址が確認されている。平安時代以降の遺物は、SB5上層より検出された羽口だけで、遺構は確認されていない。(檀原長則)



写真 SD2 単純口縁台付器出土状況

遺跡全体図



第3節 弥生時代の 遺構と遺物

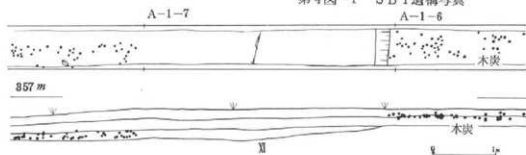
(1) 住居址

SB1 Y1 A-1-5

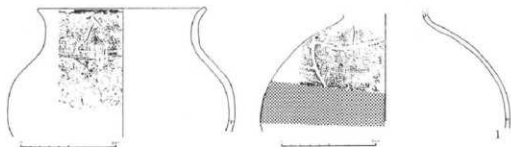
北側に市道5503号線が走り、僅かに北西に傾斜している。A-1グリットの5～6地点に土器が集中し、3～4は皆無、その他は、散発的に検出された。時期は、弥生箱清水期のものが多数で、縄文と古式土師も僅か混在していた。住居址のプランは、やや明確さに欠けていたが、後期末葉と思われる。壺形土器(4図-3)は、頸部に細かな麻状文を施し胴部は赤彩されている。



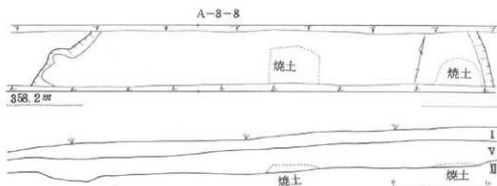
第4図-1 SB1遺構写真



第4図-2 SB1遺構実測図



第4図-3 SB1出土遺物



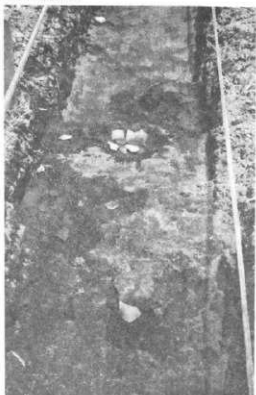
第5図 SB2遺構実測図

SB2 Y2 A-3-8

SD2の溝状遺構の東方約20mの地点に存在し、覆土は、割に浅かった。長径4m程のプランで、東壁で3cm、西壁が12cmの落ち込みで、中央部に径50cmと東壁際に径40cm程の焼土部分（火床）が存在していた。また床面には、全面木炭片が散在し火災で焼失した住居址と思われ、土器片は少量で、箱清水期の折り返し口縁の壺破片などがみられた。

SB4 Y3 A-5-4

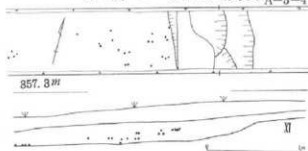
東側部分が、段状に20cm落ち込み、床面からは、12cmの落ち込みとなっていた。傾斜西側のプランは確認されていない。土器は縄文と古式土師が極く少量で、箱清水期のものも高坏片などで量的には少ない。遺構面までの深さは、表面土より30cmであった。



第6図-1 SB4遺構写真 A-5-4

SB6 Y4 A-7-3

住居址の北壁部分が約4m検出され、北方に延長しており、隅部に柱穴径20cm、深さ15cmが存在し、壁高は15～25cmである。覆土中の箱清水期の土器片は80個程で、やはり、少量の縄文と古式土師の破片が検出された。



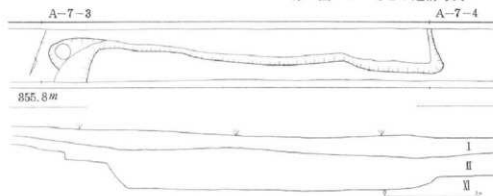
第6図-2 SB4遺構実測図



第7図-3 SB6出土遺物



第7図-1 SB6遺構写真

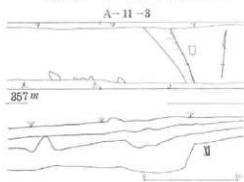


第7図-2 SB6遺構実測図

SB7 Y5

A-11-3

位置は丘上の最頂部を占め、東側に25m程の壁面の落ち込みがみられたが、西方の壁面は、傾斜面で、破壊されて不明である。土器片は、



第8図-2 SB7遺構実測図



第8図-1 SB7遺構写真

箱清水期のものが最多数で、古式土師が次ぎ、栗
林期が2片、縄文が3片検出した。



第10図-1 SB 11 遺構写真

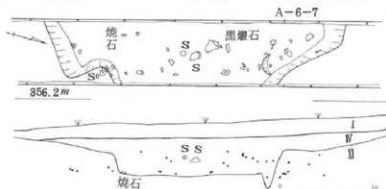


第9図-1 SB 10 遺構写真

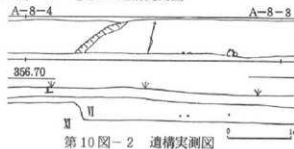
SB 10 Y 6

A-6-7

住居址の東南部の隅
部分が検出されたも
ので、覆土30cm、壁面高
さ42cmを測り、北側に
小溝が走っていた。覆
土中に、かなりの土器
片が検出された。縄文
は8片程で、中にU字
状文の土器片もみられた。あとは箱
清水期のもので、甕破片、その他の
土器片である。床面上に焼けた石が
みられ、鉄平石、黒曜石片も検出さ
れた。



第9図-2 SB 10 遺構実測図



第10図-2 遺構実測図

SB 11 Y7 A-8-3

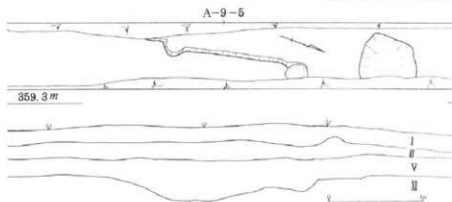
東側の壁面深さ27.5cm、西側の壁は、確認されていない。
土器は、箱清水期が最多で、古式土師が次ぎ、縄文は10片
程である。中央部に10cmの平盤石が、土器片と重なってい
た。

SB 12 Y8 A-9-4

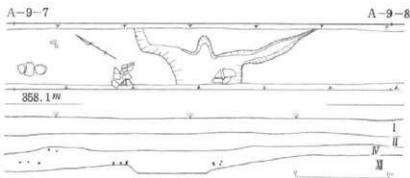
南側の壁面の深さは、8cm、東側は、10cm前後で、5m程
で、方形状？をなす。覆土中の土器は、縄文、栗林期、古式
土師が少量で、箱清水期のものが、多量である。床面上から
検出された箱清水期のものは、高坏、壺下半部、甕、紡錘車
などである。



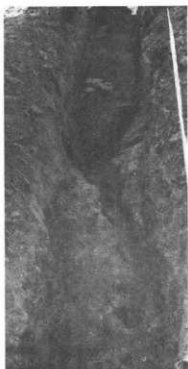
第11図-1 SB 12遺構写真



第11図-2 SB 12遺構実測図



第12図-2 SB 13遺構実測図



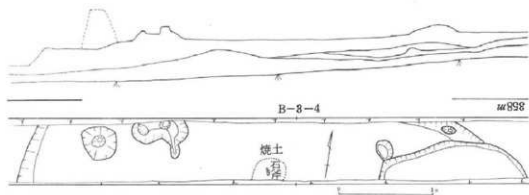
第12図-1 SB13遺構写真

SB13 Y9 A-9-7

地表下25cmに小さな溝が、住居址の南側に設けられた溝に連絡している。この溝は、床面よりは、約10cmの深さである。覆土中には、縄文、栗林期、古式土師がみられたが、床面上は、箱清水期の壺破片、甕底部などがみられた。



第13図-1 SB15遺構写真



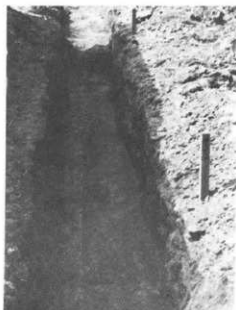
第13図-2 SB15遺構実測図

SB15 Y10 B-3-4

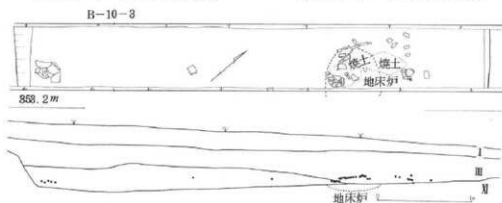
柱穴が4ヶ所検出され、その他小さな凹み状の遺構もみられ、西側には、やや大きな落ち込みがみられたが、壁面その他は不明である。土器片は少なくローリングされているが、栗林期、箱清水期、古式土師、縄文の順となっているが、量は少ない。柱穴は径20cm、深さ7~10cmの浅いものである。時期は、やや不確定である。



第14図-1 SB 18遺構写真



第14図-2 SB 18遺構写真



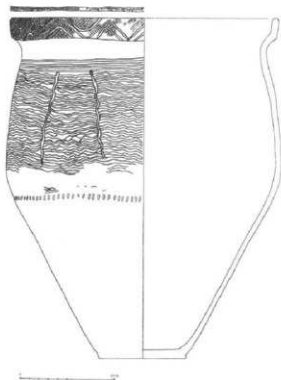
第14図-3 SB 18遺構実測図

SB 18 Y 11 B-10-2

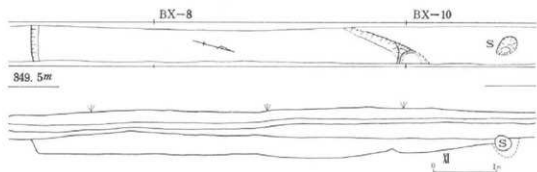
東南方のやや傾斜面に位置し、表土より50～60cm下に床面が確認できた。両端まで約5mを測り、西方の壁は、40cmを測る。地床炉は、やや東よりに設けられ、径60cmの円形で、最深部は床面より7cmで赤褐色に焼け、やや焼土が北方に広がっていた。この炉面上の土器は、(14図-4)の甕形土器で頸部に櫛描平行線、下に波状文、蛇行沈線文、下半部に山形文、口縁部は縄文、地上に山形沈線文を施し口唇まで、縄文を施文している。これは栗林式の後続形式を示す様相の土器で、他の伴出した土器片も刻期のものばかりで、住居址の時期は、吉田式直前と考えている。(檜原長則)



第15図-1 SB 20遺構写真



第14図-4 SB 18出土遺物



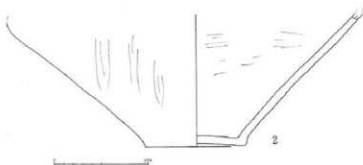
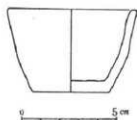
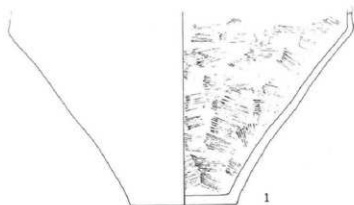
第15図-2 SB 20遺構実測図

SB 20 Y 12 BX-8~9

BXトレンチのはぼ中央部にあたるBX-7~10グリッドにかけて検出された遺構であり、弥生後期末葉の土器が多量に伴出していることから、同時期に比定される住居址であろう。南側に約23cm、北側に約14cmの壁面をもち、床面はほぼ水平に掘り込まれていた。また床面よりやや浮いた状態で、胴径36~37cmに及ぶ壺形土器の破片(15図-3、1・2)が落ち込み

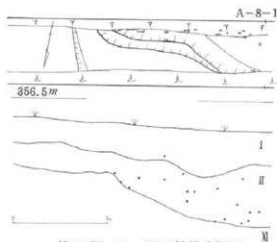
中央部に集積されていた。

北壁東端に検出された柱
穴は、径35cm、深さ16cm
を測った。



第16図-3 SD3遺物

第15図-3 SB20出土遺物



第16図-2 SD3遺構実測図



第16図-1 SD3遺構写真



第16図-4 SD3遺物

(2) 溝状遺構

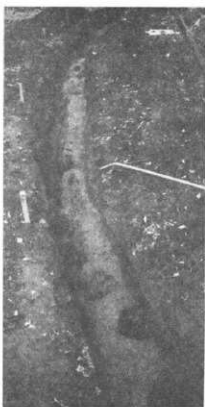
SD3 Y1 A-8-1

A-8通りの西端に位置して遺構が、確認された東側に、13cm程の段差があり、発掘坑に斜状に13.3m、44cmと段差状に落ち込んでいたが、調査の性格上それ以上の確認が不可能であったが、最下層の土器片は箱清水期のものが多く、古式土師も少量含まれていた。縄文片は全部で8片程で、溝の時期は、箱清水期としたのは、土器片のあり方からで、復元できた器形は存在しなく、時期は確定的ではなく、東北方向に等高線状に走る溝址の存在を知ることができた。なお西側の最深部は、現地表面より1mの深さである。

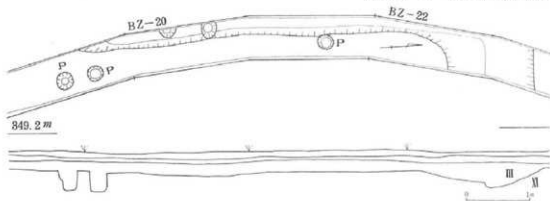
SD10 Y2 BZ-21~22

BZ-19~23グリットにかけて検出された遺構である。規模は、幅約140cm、深さ約30cmを測る溝状遺構である。

まず、BZ-22~23グリットからBZトレンチを東西に横切る形で確認され、その後、溝状遺構は南方向



第17図-1 SD10遺構写真



第17図-2 SD10遺構実測図

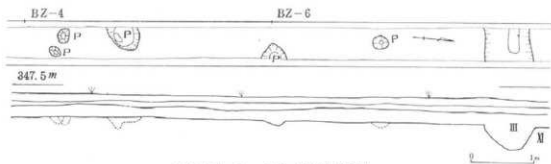
に向きを変え、BZトレンチに沿った状態ではほぼ直線的にBZ-20グリット付近まで延び、再び方向を西に変化させ調査区外に消失してしまっている。遺物は、箱清水式土器がほとんどであり、栗林式土器が少量混入する程度であり、古式土師器については、その出土量は極めて少量であった。前述した4例の溝状遺構とは、その規模また出土遺物の差異から同一性格の遺構とは考えがたく、そして時期的にも弥生後期に比定されるものであろう。

SK4 B2-8

BZ-8 グリットより検出された遺構である。規模は、深さ約35cm、径は、南北については約60cm、東西については、調査坑の制限にさえぎられて測定不可能ではあるが、ほぼ円形に近いものであろう。土坑内からの出土遺物は、弥生後期の土器がほとんどを占めていた。(徳竹雅之)



第18図-1 SK4遺構写真



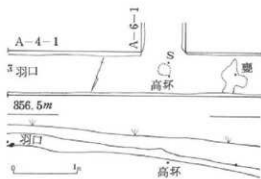
第18図-2 SK4遺構実測図

第3節 古墳時代の遺構と遺物

(1) 住居址

SB3 H1 A-4-2

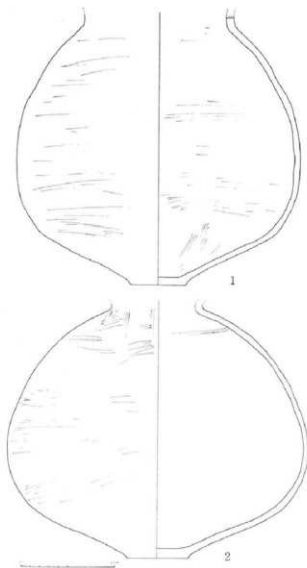
ここは、地層が明確さを欠いており、プランは確認されていない。A-2通りとA-4通りの接点の地表下22cmの位置より中世の羽口(38図-3)が検出され、それより西方2.4mの下層20cmの位置に高杯脚部、さらに西1mの位置に壺(19図-4, 1・2)が展開していた。



第19图-3 SB3 遗构实测图



第19图-1 SB3 遗构写真



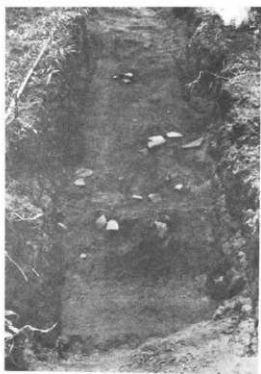
第19图-4 SB3 遗物实测图



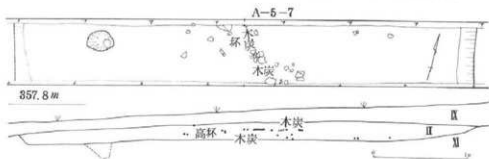
第19图-2 SB3 遗构写真

SB5 H2 A-5-7

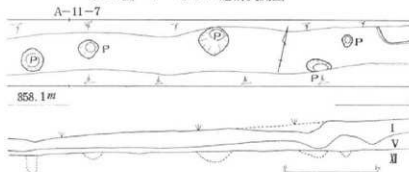
住居址面は、表土面より東側で-40cm、西側で-22cmで、東壁16cm、西壁9cm程の落差である。両端の径は、4.85mである。西壁寄りの柱穴は、径2.8×20cm深さ16.5cmである。検出された土器は少量で、縄文1片に箱清水期のもの、次に古式土師で、台付甕の脚部や、木炭片がみられた。時期は、床面上の甕破片の古式土師により決定した。



第20図-1 SB5遺構写真



第20図-2 SB5遺構実測図



第21図-2 SB8遺構実測図

SB8 H3 A-11-7

A-11-6～A-11-10までは、遺構が連続し、SB8も住居址としては、プランが明確でない。柱穴が連続してみられるが、最大のもの径30cm、深さ12cm程である。またSB9の間にも、ローム面に遺構が連続していたが、調査が限定されているため、明確でないが、幅25～30cm、深さ15cm程の小溝もみられた。土器は、古式土師を主体とする。



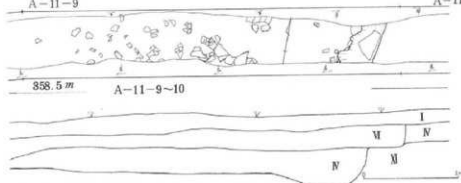
第21図-1 SB8遺構写真



第22図-1 SB9遺構写真
A-11-9



第22図-2 SB9遺物出土写真
A-11-10

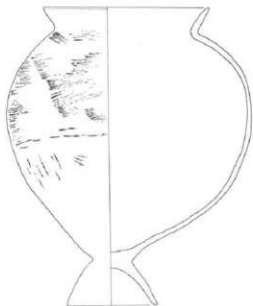


第22図-3 SB9遺構実測図

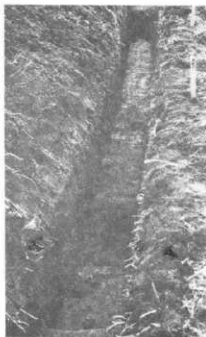
SB9 H4 A-11-9

住居址東側の覆土の深さは、29cm、壁面の高さは26cmで壁際に20×30cm、深さ10cm程の落ち込みがみられた。調査坑での住居址の径は4mを測る。検出した土器は、箱清水期のものも含むが、床面の土器は、古式土師で、中央部に(22図-4)の台付甕が、展開していた。(写真)その他、石英粒のめだつ大形壺、台付甕、2次焼成痕のある甕破片などが検出され、刷毛目痕の顕著な甕破片などがみられた。

(檀原長則)



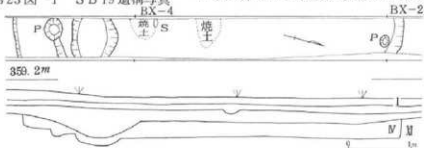
第22図-4 遺物実測図



第23図-1 SB19遺構写真
BX-4

SB19 H8 BX-2~5

BXトレンチ南側のBX-2~5グリットにかけて検出された遺構であり、出土遺物は古式土師器が顕著であり、同時期の住居址と考える。南側に約30cm、北側に約20cmのほぼ垂直に掘り込んだ壁面をもち、北側については、北壁から内側に約40cmのところまで再び約10cm程落ち込み床面に達し、ベッド状のテーブルを形成している。床面はほぼ水平に掘り込まれており、中央部とそれよりやや北側にそれぞれ、径約40cmと径約25cmの焼土が確認されたが、極薄い



第23図-2 SB19遺構実測図

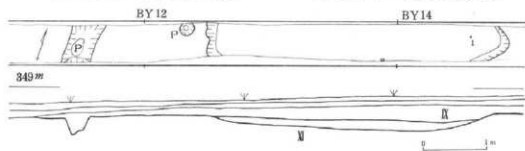
ものであり、地床炉的性格を有するかは、両者とも疑わしい検出状態であった。また、南・北両壁に接する状態で検出された3カ所の落ち込みは、すべて5cm前後と浅く底面からの遺物の出土も確認されなかった。



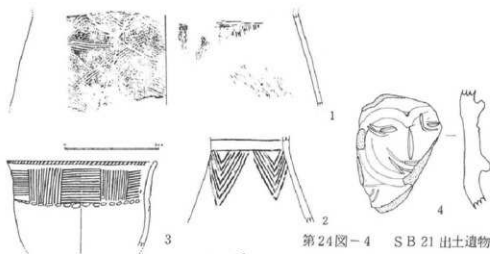
第24図-1 SB 21 遺構写真



第24図-2 SB 21 出土遺物



第24図-3 SB 21 遺構実測図



第24図-4 SB 21 出土遺物

SB 21 H 9 BY-14

BYトレンチ中央部のBY 12～14グリットにかけて検出された遺構であり、出土遺物は縄文中期から古式土師器にかけて多種にわたっていた。

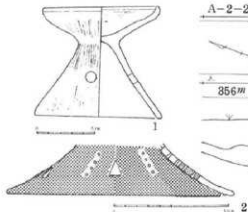
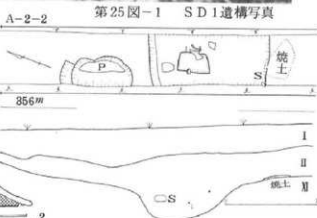
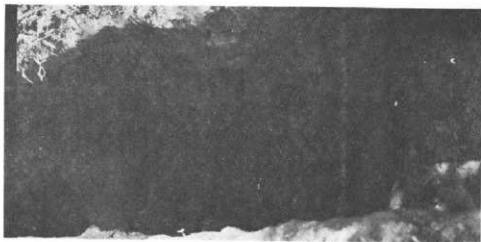
表土下20cm前後の検出であるため、東西とも壁は明確には確認できない状態であり、また床面はやや東側に向かって傾斜をもっていた。

BY-14グリット出土の人面土器片(22図-4、4)は、住居址東よりの床面から10cm弱程上部からの単独出土であり、住居址の年代とは異なる遺物であろうと考えられ、住居址の推定年代は、古式土師器と同時期に比定されるものであろう。(徳竹雅之)

(2) 溝状遺構

SD 1 H 1 A-2-2

発掘坑に対して直交して幅1.1mの溝と北に隣接して土坑状の遺構が存在した。坑底までは、1.3mに達する。上層より土器片がみられたが、接合できるものはなく、坑底より器台(25図-3、2)が検出された。



第25図-3 SD 1出土遺物

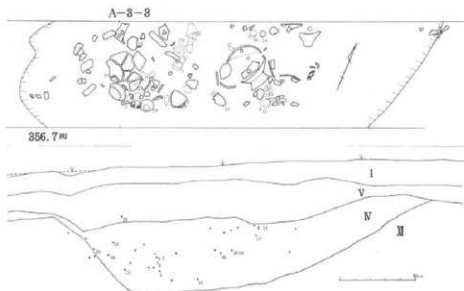
第25図-2 SD 1遺構実測図

SD2 H2 A-3-3

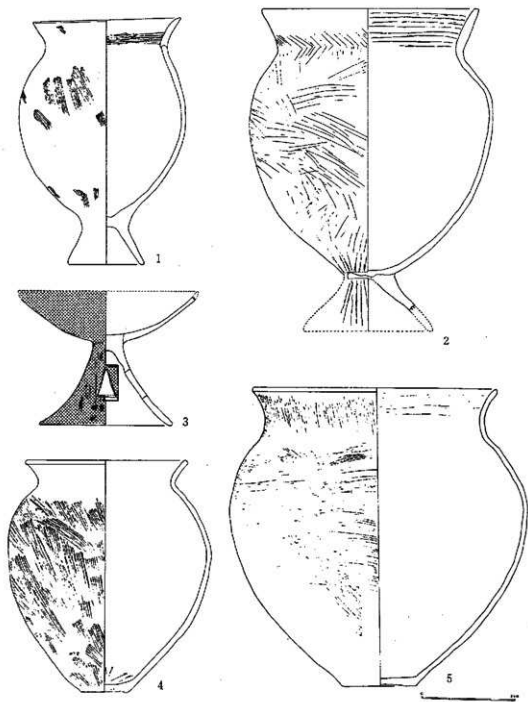
SD1の東方6mの位置に検出され、両者は直接には、関係はないと考えられる。調査坑とは、斜状に交わり、地表下40cmの辺より、土器類が累々と重なって検出された。坑は、両方がやや傾斜し東側は緩やかである。この中に、復元完形の土器から破片(コンテナ2箱)が多数発見され、(23図-3、4・5)中には、縄文中期土器(41図-1、2)箱清水期のものもみられたが、他は箱清水期終末から、古式土師のもので、図示したものは、あまり時期差はないものと思われる。溝の方向については、前述の如き条件の調査であるが、西北方に軸とする周溝の一部の可能性が強い。廃棄、埋没、埋納、いずれにしても検出された台付甕や、手培り形土器などは、煤状付着や2次焼成痕が顕著で、使用されたものである。又縄文中期と思われる打製石斧(42図)敲打痕のある自然石、安山岩の平盤石などが埋没土の中にみられた。



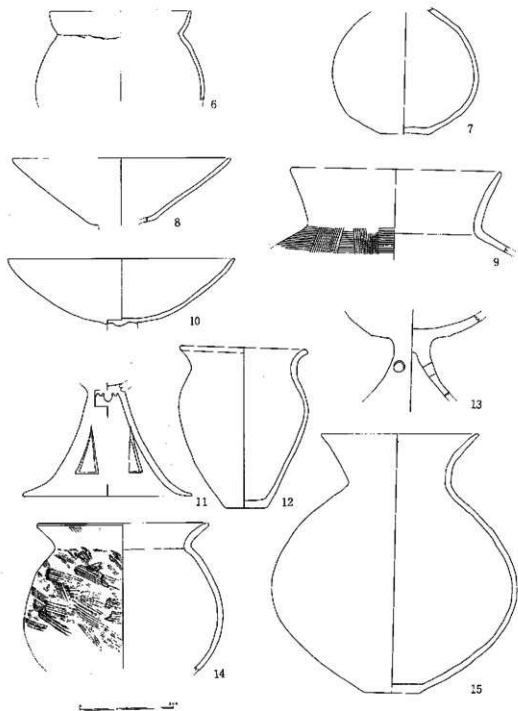
第26図-1 SD2遺構写真



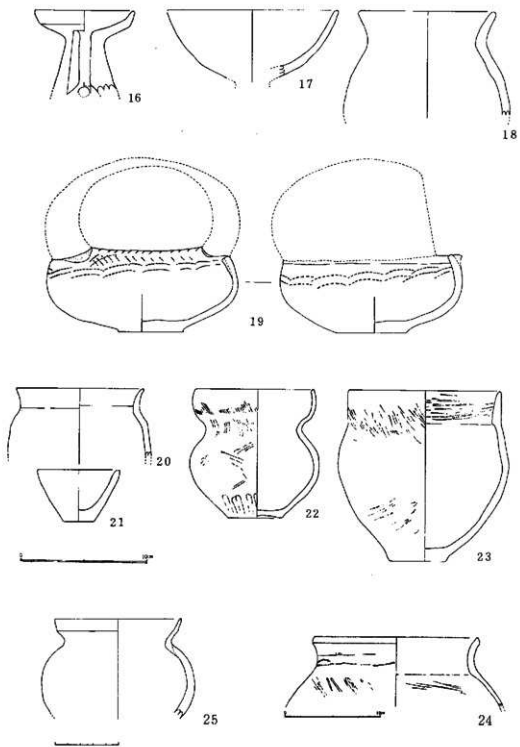
第26図-2 SD2遺構実測図



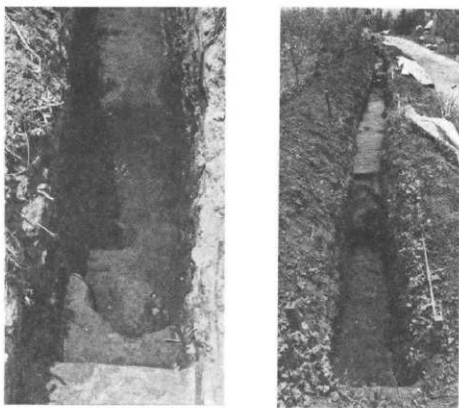
第 26 图-3 SD 2 出土遺物実測図



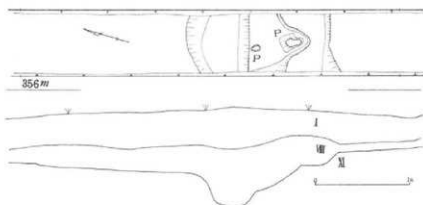
第 26 图-4 SD 2 遺構出土遺物



第26图-5 SD2 遺構川土遺物



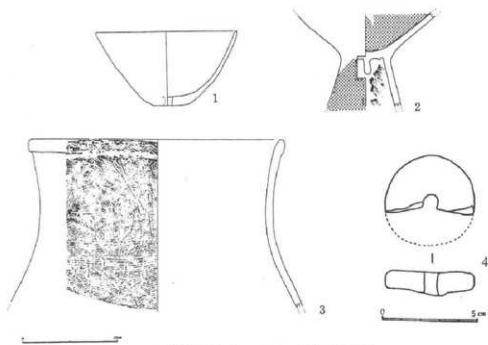
第 27 図-1 SD 4 遺構写真



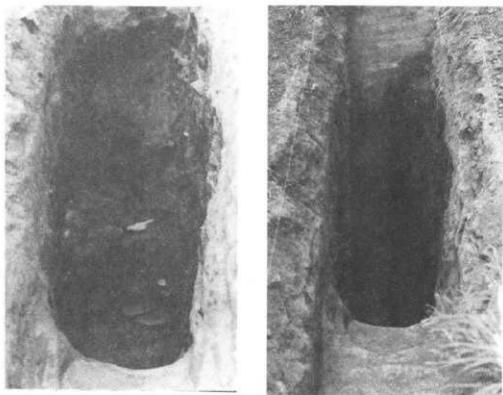
第 27 図-2 SD 4 遺構実測図

SD 4 H3 A-9-1

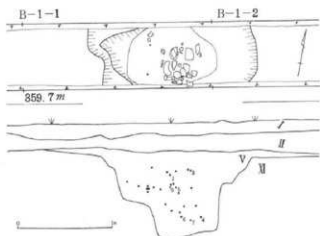
調査坑に直交して掘られた溝で、北側部分に上層面を除いて深さ 25cm の掘り込み面が 1.7 m あり、溝は幅 1 m 余、深さ 30 cm で南側は段状をなす。



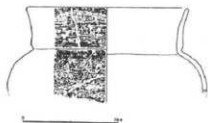
第27図-3 SD4 遺物出土遺物



第28図-1 SD5遺構写真



第28図-2 SD5遺構図



第28図-3 SD5出土遺物
実測図

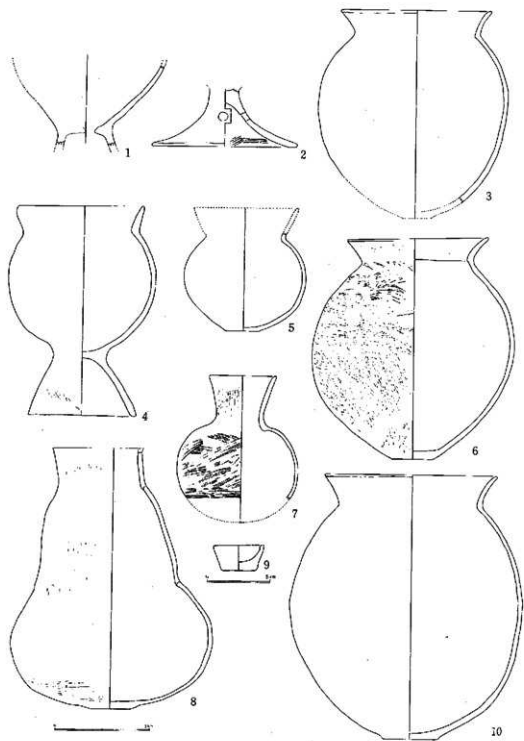
SD5 H4 B-1-1

位置は昭和26年調査時の上段の平坦面に所在する調査坑と直交する、上面幅1.8 m前後で西側が屈折し段状を呈する。深さは地表面より127 cmに達し、南北方向に延長するものと思われる。(28図-2)土器は、上層より中央部に集中して検出され、深さが増すにつれ、完形土器や復元できた土器が検出されている。縄文中期土器、硬玉未製品、黒曜石片、石鏃、栗林期、箱清水期の土器片が検出されたが、主体は古式土師器で、小形台付甕、甕形土器、完形の甕形土器(28図-2, 6)は、調査坑南側に深くはいり込んで斜状に倒置し、底部分の $\frac{1}{2}$ 程度が土が充満しない状態で検出された。又径5~10 cm程の小石が、5個程混在していた。

(榎原長則)



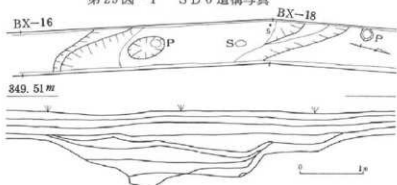
第28図-4 SD5遺構写真



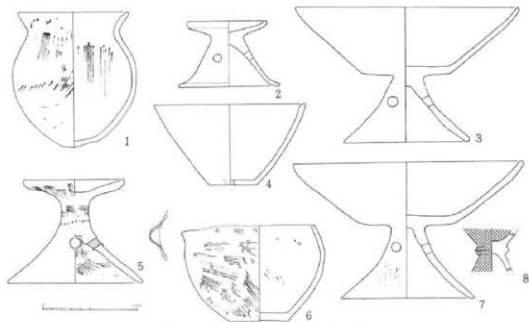
第 28 图-2 SD 5 出土遺物実測図



第29图-1 SD6 遺構写真



第29图-2 SD6 遺構実測図



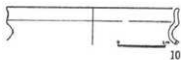
第29图-3 SD6 出土遺物実測図

SD 6 H 5 BX-17~18

BXトレンチ北隅のBX-16~18グリットにかけて検出された遺構であり、北西方向から南東方向にBXトレンチを斜めに横切る状態で検出された溝状遺構である。A-3-3グリットにおいて検出された溝状遺構と類似する形態を呈している。規模は、幅約200cm、深さ約80cmを測った。遺物は、縄文中期から古式土師器にかけ多種多様であったが、中でも底部付近より多量に出土した古式土師器については、坏部下方に稜線を有する高坏に代表される北陸の影響を受けた土器等と、S字口縁を有する東海方面からの影響を受けた土器等が同一溝内のかつ同レベルの地点に混在していたことは注目される点であろう。



第29図-4 SD6出土遺物実測図



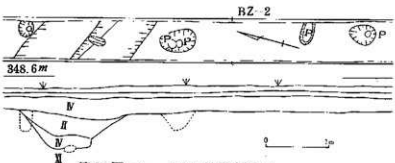
SD 7 H 6 BZ-3~4

今回調査地区の最北地域に所存するBY、BZトレンチのうち、BZ-3~4グリットにかけて検出された遺構である。SD6と同様に西北方向から東南方向にトレンチを斜めに横切る状態で検出された溝状遺構であるが、SD6の場合ほど底部に平坦面をもたず、すり鉢状を呈



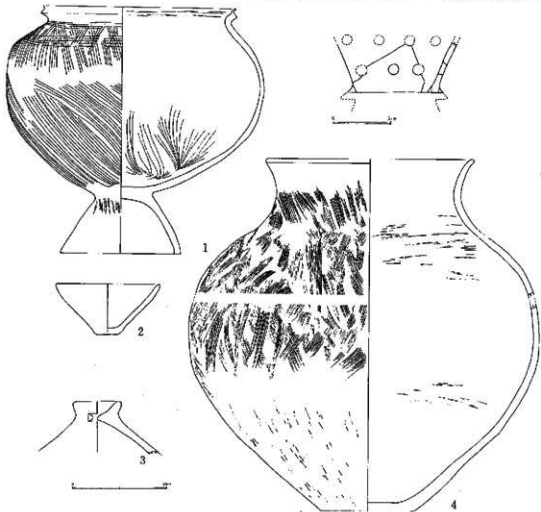
第30図-1 SD7遺構写真

している。規模は、幅約200cm、深さ約90cmを測った。遺物は弥生後期の土器が主流を示すことは、例にはもれないが、S字口縁を有する台付甕(30図-3, 1)、裝飾器台(30図-3, 5)等



第30図-2 SD7 遺構実測図

を始めとする古式土師器に分類される土器片が極底部付近に集積していたことから、古式土師器に伴う遺構と考える。また、溝状遺構の周囲から4カ所の柱穴を検出したが、それぞれ規模が不統一であることと、限定された範囲内の調査であるため遺構の性格については確認できなかった。

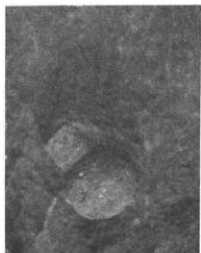


第30図-3 SD7 出土遺物実測図

SD8 H7 BX-4~5

BY-4~5グリットにかけて検出された遺構であり、北方向から南方向にBYトレンチを横切りSD7へ延びる同一の遺状遺構である。生憎後世のパイプ埋設工事のため遺構のほぼ中央部に表土より幅約70cmに掘さくがなされており、そのため溝状遺構の底部確認不可能となっていた。しかし残存部より推定する規模は、他地区検出の同性格の遺構同様に、幅約200cm、深さ約100cm前後を呈するであろう。

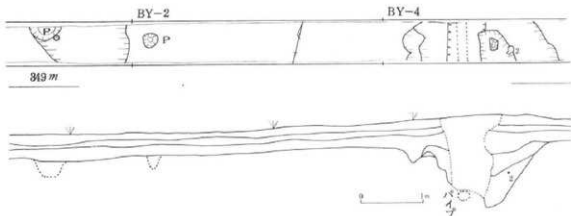
遺物については、東側の壁面中央やや下方に天地逆転し、横たわる状態で出土した直口壺(31図-4、2)をはじめとして、底部付近より古式土師器の出土が目立つため、SD7同様に同時期に比定される遺構であろう。



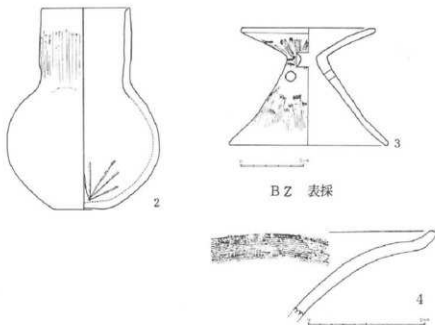
第31図-2 SD8遺物出土写真



第31図-1 SD8遺構写真



第31図-3 SD8遺構実測図



第31図-4 SD8出土遺物実測図

SD9 H8 BY-7~8

BY-7~8グリットにかけて検出された遺構であり、北方向から南方向へBYトレンチをやや斜めに横切った状態で確認された。トレンチの横断方向から考え、SD7、SD8、SD9は連続する同一の溝状遺構であると考えられる。また底部が、はっきりとした水平面を持たない点は、他と異なる面はあるものの、幅約200cm、深さ約80cmと大差は認められず、同一溝状遺構と考えることにいずれの支障もないであろう。

遺物は、量的には弥生後期の土器が主ではあるが、古式土師器の出土状態及び前述の2例の遺構との関連から考慮した場合、当遺構は古式土師器と同一時期に比定される。



第32図-1 SD9遺構写真

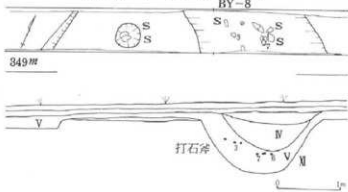
ものと考えられよう。
(徳竹雅之)



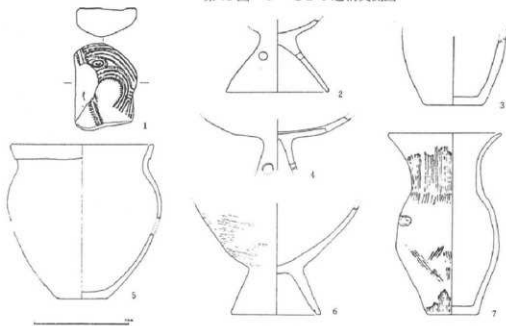
第32図-2 SD9 遺構写真
HY-8



土偶拓影図



第32図-3 SD9 遺構実測図

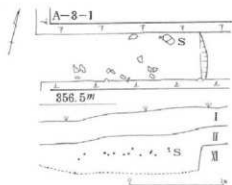


第32図-4 SD9 出土遺物実測図

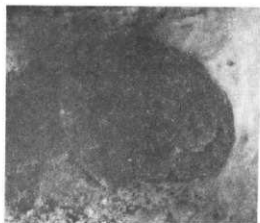
(3) 土 塚

SK 1 H 1 A-3-1

SD 2 の西方 1.5 m に位置し、長径 60 cm 短径 40 cm を測る。深さは地表下より 105 cm、
 ローム面よりは 57 cm である。中に焼土、炭などと共に縄文、箱清水期、古式土師の土器片
 が混在していたが、復原されたものは無い。

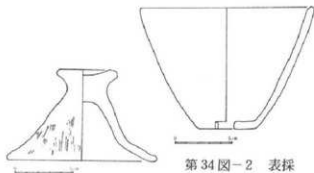


第 33 図-2 SK 1 遺構実測図



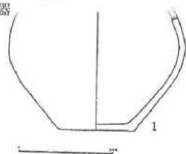
第 33 図-1 SK 1 遺構写真

SK 2 H 2 A-9-5



第 34 図-2 表採
 甌形土器

第 34 図-3 BY-1 出土
 蓋形土器

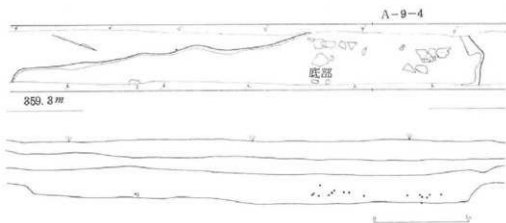


第 34 図-3
 表採 甌形土器



第 34 図-1 SK 2 遺構写真

SB 11 (Y 7住) の南側に隣接した遺構で、部分的な検出であり、また挟入部があり、高低差も認められ遺構の把握は困難であるが、一応土坑の遺構とした。(植原長則)



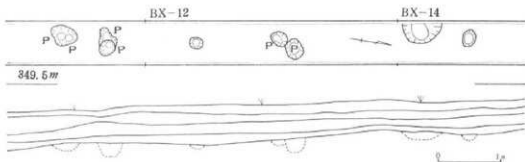
第34図-4 SK 2 遺構実測図

SK 3 H3 BX-14

BX-11 ~ 14グリットにかけて検出された遺構であり、大小さまざまな土坑及び柱穴群である。すべてローム層を15cm前後掘り込んだ状態で検出された。遺物等から考慮し、古式土師器と同時期に比定される遺構であろうと考えるが、調査区の制限から周囲の状況を確認できなため、性格までは判断できなかった。



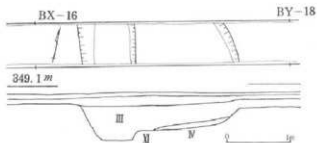
第35図-1 SK 3 遺構写真



第35図-2 SK 3 遺構実測図

SK 5 H 4 BY-18

BY-18グリットより検出した遺構であり、規模は南北の径は調査坑の制限から確定できないが、東西については約250cmを測った。深さは、約50cmであった。床面は、二段状を呈していた。遺物は、3分の2が古式土師器によって占められており、時期も同時期に比定されるものとする。



第36図-2 SK 5遺構実測図



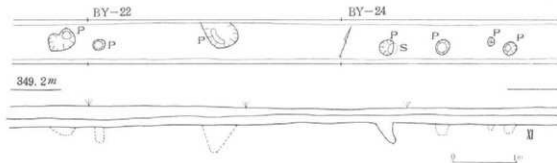
第36図-1 SK 5遺構写真

SK 6 H 5 BY-23

BY-23グリットより検出された遺構であり、規模は、径約50cm、深さ約40cmを測り、突底状に掘り込まれている。また周囲の柱穴群は、すべてローム層に15cm前後掘り込んだ状態で検出されていた。しかし、前例のとおりに調査坑の制約のため周囲との関連については確認できなかった。(徳竹雅之)



第37図-1 SK 6遺構写真



第37図-2 SK 6遺構実測図

第4節 平安時代とそれ以後の遺構と遺物

(1) 住居址

SB 14 H5 B-2-6

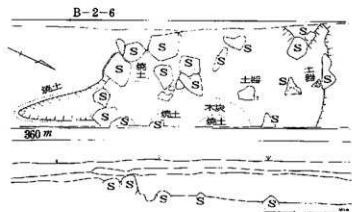
ここも遺構を分断する形で調査坑が入り、炉石が散在していた。炉石の最高位は、覆土が20cm程しかなく原形は不明である。床面までの深さは50cmに達した。焼土部分が煙道前に散在していたが、炉の範囲の東側の部分が不明のため、規模は不明である。煙道は入口部で幅50cm、長さ1m程で漸次幅を減じて、先端は角丸で終わっており、周囲に幅5cmに亘って焼土化していた。また鉄滓の小破片がみられたほか、最大のもは、重さ100gのものである。また土器は床面上10cm位から多く検出された、丸底の壘形土器で、上半部から下半部にかけて叩き目が顕著である。(38図-4、1・2) その他は、同期の内黒高台付坏などが検出され、床面下より箱清水期、栗林期の土器片がみられ、覆土中にも前記土器の外、古式土師もみられた。遺構面は、北方に向けて拡がり、一応長さ5m位の線が確定でき、黒色土が埋没して地勢は、やや北側が低くなっている。以上記してきたように、この住居址は、小鍛冶段階の作業場と考えられ、須恵器製作の技法と同じ叩き目の壘と、内黒坏の年代から、11世紀代のものと思われる。



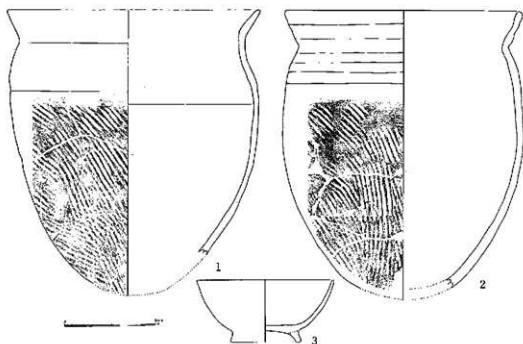
第38図-2 SB 14 遺構写真



第38図-1 SB 14 遺構写真



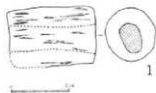
第38図-3 SB14遺物実測図



第38図-4 SB14 出土遺物実測図

SB 16 H 6 B-3-9

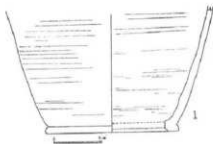
SB 14 より東方 35 m 地点で検出されたもので、住居址の遺構幅は、4.8 m を測る。床面までの覆土は 40 cm、壁面の高さは、左右 10 cm 程である。住居址からは、4 カ所に分れて、刻期の土器が検出されたが、SB 14 で検出され、同時期の叩き目釜、内黒高台付杯、内黒杯などが中央部より灰釉片が出上した。(38 図-4、1) これは猿投窯、黒笹 90 号に比定できる短頸壺の破片と考えられる。



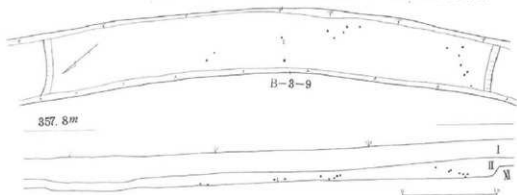
第39図-3
A-2-5地点出土羽口



第39図-1 SB16遺構写真



第39図-4 B-3-8出土遺物



第39図-2 SB16遺構実測図

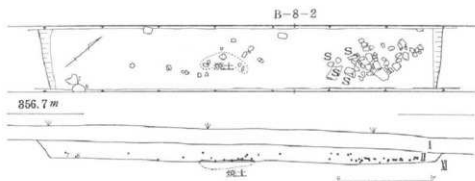
SB 17 H 7 B-8-2

SB 16より13 m東よりの、やや低地に所在し、覆土は15 cmと浅く、床面までは35 cm程である。遺構幅(住居址)の長さは4.25 mで壁面の高さは、西側17 cm、東側10 cm程である。中央部に焼土部分がみられ、それより東80 cmに平盤石2個が存在していた。その東側に甕、小形甕(40図-3、9)があり、西の壁際には、坏2個などが検出された。(40図-3)その他、内黒高台付坏、内黒坏などが検出された。

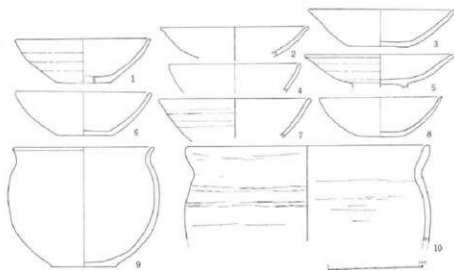
(植原長則)



第40图-1 SB17 遺構写真



第40图-2 SB17 遺構実測図



第40图-3 SB17 出土遺物実測図

第IV章 考 察

第1節 縄文時代の遺物について

(1) 土 器

今回の調査で検出された縄文時代の土器片は、すべて中期に属し、初頭から前葉のものが大部分で、続いて中葉、後葉に属するもので、中葉までの土器は、広義の北陸文化圏に属する土器で、大小の竹管状工具により施文する隆起線によって区画された土器を特徴としている。竹管施文は、前期より盛んに用いられたが、特にこの地域の初頭、前葉期の土器に顕著に施文されている。この期に属する遺跡の調査例は、現在のところ少ないが、北信では、戸倉町、蝶葉遺跡(関、昭41)、飯山市、深沢遺跡(飯山北高、昭41)(長野県史、昭57)豊野町、上浅野遺跡(長野県史、昭57) 中野市姥ヶ沢遺跡(中野市教委、昭58)などで当地方の初頭、前葉期の土器様相が判明してきた。

それに加えて、近年の発掘調査例の増加に伴って、主体をなす北陸地方の様相も逐次判明しつつあり、近年の論考では、南久和「北陸の縄文時代中期の編年」⁶⁷⁾(昭59)が発表され、それに対し中部高地との編年対比を数野雅彦「北陸系土器研究序説」⁶⁸⁾(昭61)で攻究されている。その編年案によると、

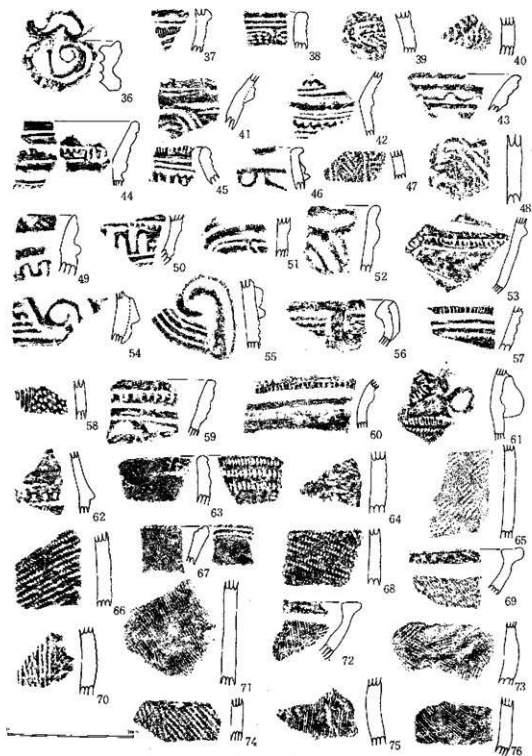
(中部高地) 五領ヶ台式前半—同後半—貉沢式Ⅰ~Ⅱ期—貉沢式Ⅲ期—新道式(藤内式)

(北陸地方) 新保式—— 徳前C式—新崎Ⅰ式——新崎Ⅱ式——上山田Ⅰ式

の併行関係が認められ、深沢遺跡や姥ヶ沢遺跡で検出された深鉢(長野県史深沢遺跡、第1図4~7、姥ヶ沢21区)にみられるU字状文(U文)は、新崎式の代表的施文の蓮華状文の形とされており、これらの土器は、五領ヶ台式後半=徳前C式の時期に刻当すると考えられている。この時期の土器は、41図24・30・31で、同図11・13・16~18の結節縄文などは、下半部の文様と思われる。この時期より判古すると思われるのは、同図20~23・28などである。同図34・35もほぼ同時期の所産である。新崎式併行期の所産のものは、図37 37の蓮華状文47・48の格子文のもので、後者は、判古する様相がある。次の貉沢Ⅲ期から新道式併行期のものは、38~40で、阿玉台式の影響の考えられるもの、54・55の継手状の渦巻文の土器は、徳前C式併行と考えられる。57・61の連続刺突沈文の土器は、南(昭52)によれば、上山田式=新道式併行に求められるとし、文様パターンが、新崎式以前の北陸系土器が、縦横の文様区画(同図16・17・26・28~35)で同図33の如く刺突が区画にそって連続するものが古く、該期には、三角形、栗実形、長方形、楕円形、双葉形等の文



第 41 图 - 1 繩文土器拓影圖



第 41 圖-2 繩文土器拓影圖

様パターンに変化し、祖形は、中部山地の新道式や関東の阿玉台1B式に求められるとして、文様区画が変化に富んだものになっているとされている。52の土器は、中期後半、新潟県の馬高式(占)の様相の土器で、62～76の土器は、中期終末の関東の加曾利E式併行の土器と思われる。

2) 人面土器 (24図-4、4)

BY7地点から検出されたもので、赤黄褐色の堅緻な焼成の土器片で、前述のU字文のみられる深鉢の胴上半部に、粘土をハート状に附加して顔の輪郭を抽出している。目、鼻、口は、篋状工具による沈刻で描き、目尻と口端に2条、入れ墨状の沈線を描いている。このような人面意匠の土器は、中期以後の土器に時々みられ、かつて八幡(1956)⁽²⁾は、1. 縄文式土器に人物意匠の装飾がみられるのは、大体土偶の行われた時期及び地域である。2. 土偶装飾と土偶の制作が一致する。3. 中期の深鉢の口縁・釣手土器の釣手上部に施される人面を伴うものは、単なる装飾意匠と考えられない性格が考えられる。とされている。

3) 土偶片 (32図-4、1)

BY7～8上拡から検出された土偶の破片と思われるもので、金雲母の含む赤褐色を呈する堅緻な焼成で、半割した破片である。盛り上がった部分が、細い半截竹管で、直線・曲線などを描き、列点状刺突文と連続刺突沈文が、無文地縁辺に施されている。これは、姥ヶ沢遺跡、深沢遺跡、新潟県津南町上野遺跡、同糸魚川市長ヶ原遺跡などにみられるもので前述の如く、八ヶ岳編年、新道式期(占)に併行すると思われる。

なお、北陸系土器については、中野市教委「姥ヶ沢」(1983)の報告書を参照されたい。

4) 打製石斧 (42図)

図示した外に打製石斧の破片が15個体程検出されている。石質は全部安山岩系である。検出が遺構と密接な関係でないため、時期は確定できないが、大部分は縄文中期の所産と考えられる。(1)短冊型のもの、図3・6・12 (2)撥形のもの、図2・9・10、(3)分銅形のもものは1であるが、中期形で中央部のくびれは弱い。これらは先端部が磨滅しており、土掘具として使用されたと思われる。

5) 敲打器 (43図、1)

砂岩の自然石の両端に使用痕の見られるもの。

6) 凹石 (同図、4)

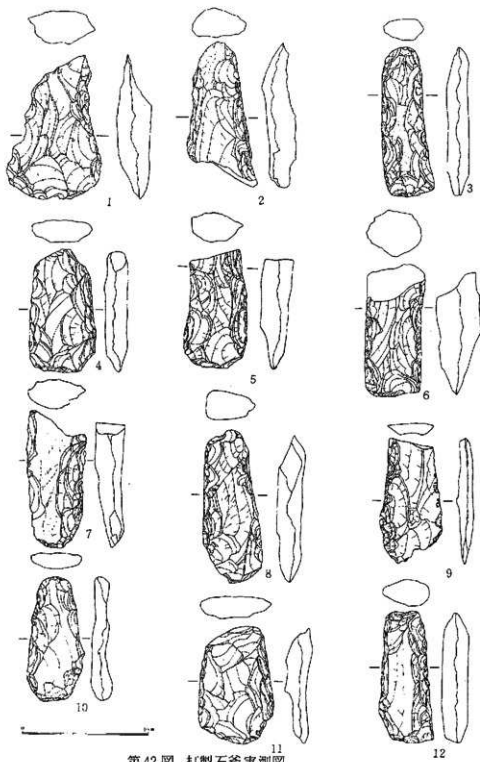
安山岩の2孔を有するもの。

7) 磨石 (同図、2)

軽石製で半月形の先端部に擦痕がみられる。

8) 砥石 (同図、5)

砂岩製で台形状の扁平石で、それぞれの面に擦痕がみられる。以上のものは、便宜上ここで掲げたが、時代は確定的でない。



第42圖 打製石斧實測圖

(9) 硬玉製品 (同図、6)

円形に近い形状で、白色部が多いが、かなり研磨されており重量は150gである。中央部に径0.5cm、深さ0.1cmの穿孔がある。SD5の溝状遺構から検出されたもので、縄文中期土器から、古式土師器までの土器が検出されており、所属時期が不確定だが、一応縄文中期の所産とし北陸文化圏の土器と姫川産の硬玉とを関連づけたい。

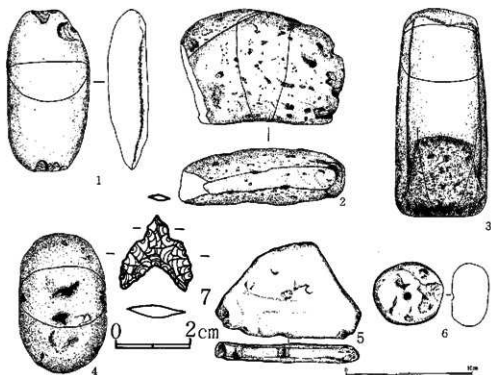
(10) 石 鏝 (同図、7)

黒曜石製のもので、分類は、凹基無茎鏝^{註)}に属し、脚部は早期の円脚鏝に似ているが、側縁に扶入部があり、図示とは逆に雁股状の使用で、漁撈具の銚先に使用されたと考えられる。精緻の出来だが、時期は特定できない。

(植原長則)

文 献

註) 鈴木清之助『石器の基礎と鑿 III 縄文』1985



第43図 石器・硬玉未成品実測図

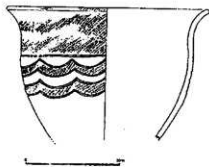
第2節 弥生時代の遺物について

弥生時代後期末葉から、古墳時代前期の編年は現在大方の関心を集めている。この安源寺遺跡も善光寺平北辺の該期の様相を知る編年資料として注目を集め、先学の業績が、蓄積され、研究史に恵まれている。幸い今回の調査で、該期の上器が多数検出されたことから、先学の業績をふまえた中で、一応編年案を提示して大方の御教示と御叱正をお願いしたい。また土器分類は、星館象他4名『信濃の弥生式土器から土師式への変遷過程(中)』『信濃』Ⅲ 35-5・6による安源寺遺跡の項を参考として行うこととし、更に「古墳時代土器研究会」1984の器種分類も準拠している。

以上の観点から、栗林式期から吉田式期にかけては、概説するにとどめ、弥生時代から古墳時代前期にかけて詳述することとした。

安源寺遺跡の弥生時代から古墳時代前期の編年案は、次の通りである。

時期	ほぼ該当する従来の編年		
I期	栗林Ⅰ式期		
Ⅱ期	栗林Ⅱ式期(百瀬式を含む)		
Ⅲ期	吉田式期		
Ⅳ期	箱清水式期		
V期	御屋敷式期	古墳時代前期Ⅰ	
Ⅵ期	十期	"	Ⅱ-1
Ⅶ期	十期	"	Ⅱ-2



B Z 16-17 出土 栗林2式甕

(1) I期 栗林Ⅰ式期

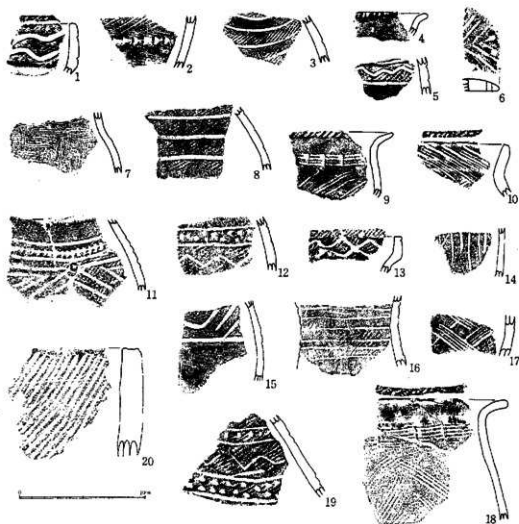
栗林式の標式遺跡の栗林遺跡は、本遺跡の北西方1kmの旧千曲川の自然堤防上に存在する大遺跡である。従って、距離的に近くまた前面に低湿地帯をひかえた本遺跡にも相関する痕跡を認めることができる。この時期の遺物は、44図10・11・12・19などで、過去の発掘でも遺構は検出されていない。当地方で遺構、遺物が、各遺跡で普遍的にみられるのは、次の栗林Ⅱ式期からである。

(2) Ⅱ期 栗林Ⅱ式期

1966年調査時の6号土坑出土土器、1979年調査時の南縁KL16出土土器、1984年小林昭八氏宅地調査時の(円形住居址検出、未発表)などが、当該期のもので今後に住居址などの遺構が検出される可能性が大きい。前記の小林昭八氏宅地調査時に、検出された小形壺形土器は、口縁が外反しない、長頸形の壺であり、第3次調査時では、口縁が外反する大形長頸壺が出土しており、頸部に数条の篋による平行沈線が施され、受け口状の口縁と口唇に縄

文が押捺され、これは、壺・甕に共通した栗林式の共通した特長である。今回の調査では、44 図 1・3・4～8・13～17・18の拓影図が該期のもので、構描文が定着したことを物語っている。このように汎千曲川水系にみられる広義の栗林式土器は、信州独自の特色ある土器として認められ、その成立の当初は、他地方からの強い影響によることが、近年の善光寺平南部地方の調査結果から察知されⅡ式期において、地域圏が確立したと推考される。また本報告では、中期最終末に編年されている。松本市百瀬遺跡出土品を標式とする百瀬式については、栗林Ⅱ式の範疇に含めて考えている。⁶⁸

該期は、千曲川下流域では、土器の文様からみて、ゆるやかな変遷をたどり、文様も省略化の方向にある。この期に属するのが、SB 18の住居址で、検出された甕形土器（14図-4）



第44図 弥生土器・須恵器拓影図

は、口縁が先行形式を踏襲しながら、頸部のくびれは、ゆるやかとなり、胴部文様は、細がきの櫛描文を施し、竇がきの沈状垂文が施されているが、整形は、均一化していて、回転台の使用が考慮されそうである。

(3) Ⅲ 期 吉田式期

吉田式土器は、長野市吉田高校校庭出土品を笹沢(1979)によって形式設定された。栗林式期に成立した千曲川水系の弥生文化からの発展を主流とし、天龍川水系の「恒川式」の影響をうけた土器が、伴出している。

今回出土した該期の土器は(24図-4)、(1)壺形土器、(A)頸部のみの残存で2条の平行文の間はL R縄文が押捺され、逆三角形の幾何学文が、5単位のところ3単位に施され(B)、他は無文で、L R縄文が僅かにみられるところがある。吉田式の古段階の所産と考えられる。

(2)壺形土器、(A)大形の壺の胴部のみの残存で、内外面ともにササラ状工具で整形し、太い櫛状工具(3~4単位)で、波状文、山形状、平行状に施文されている。(B)器面剥落して不明な点も多い土器で、口唇には、縄文?が斜状に押捺され、下に広義の太い櫛描T字文が施され、下に櫛状の列点文が施されているが、施文具は、櫛状工具の束ねたものと考えられる。器壁が薄く、堅緻に焼成されており、SB21付近に、該期の遺構が存在すると思われる。以上は、いづれも吉田式の古相の土器群で、図示していないが、赤彩された脚部の短い高杯の破片が表採されている。該期の好適例は、片塩の大徳寺遺跡出土品にある。⁽¹⁾

以上本例は、吉田式の古段階の資料と考えている。

(3)この時期の土器の文様としてまれである正面性を主張したと考えられる。

(4) Ⅳ 期 箱清水期

弥生後期に属する箱清水式は、第2次安源寺遺跡の発掘調査にもとづいて、2分案が桐原(1962)によって提起され、それに対する笹沢(1965)の反論は、それは地域差に基因するものであるとされている。以来この赤色塗彩の飾られた土器をもつクニの研究史は、大規模開発に伴って進展をみせている。

中野・飯山地方では、太田(1980)の飯山市田草川尻遺跡の1・2号住居址出土土器を田草川尻第1期(後期前葉)、3号住居址出土土器を同第Ⅲ期(後期中葉)に比定されている。⁽³⁾ また供献形態の高杯の形式変遷から青木(1984)は、後期を3期に区分している。⁽⁷⁾ ここで提示された安源寺遺跡18号土坑資料(桐原1967)、長野市神楽橋遺跡出土資料(笹沢1977)や、1986年に調査した中野市田上遺跡発掘調査出土資料などの高杯を伴出する時期を箱清水式における極盛期として外来系土器のまったく認められない時期に限定した概念でとらえている。これをⅠ期として、Ⅲ期、伝統的な箱清水式土器に加えて土師式土器のある

形態の土器を採用する時期→Ⅲ期、土師時代前期（4種の供献形態土器群が採用される時期）へと変遷⁶⁰され、天龍川水系の中島式土器圏とは1段階の差をもって土師時代に突入したと考えられている。このように箱清水式の分割案よりも、明瞭な画期を求めての編年案が、より求められる。なお、市内での発掘所見や、今回の出土品が、前述の箱清水土器が卓越していたにもかかわらず、細片が多く復原できた土器が少なく、それに比べて古式土師器が多数復原できたため、箱清水期の分析に資料不足が加担していることも否定できない。

壺形土器（15図-3、1・2）箱清水式に普遍的にみられる大形壺形土器の下半部で、明瞭な稜が最大幅で、それから上が赤彩されている。1は、内面ササラ状工具で整形され、外面は磨きされている。

壺形土器（31図-4、4）口縁部破片で、口縁が僅か立上り、その部分の外面に簾状文10条？施され、外面は、縦方向に、内面は、横方向に磨きされている赤彩が内外面に施されているが、やや剥落している。

甕形土器（A2類）（尾ほか1983による分類、以下同じ）（27図-4、3）折り返し状口縁を附した大形の甕破片で、千曲川下流地方に特長する形態で、笹沢（1986）によって、「飯山形」と称されたもので、内面磨きが、横方向に施されており、施文された波状文は、乱れを生じ頸部に簾状文が、2連施されている。この発は、あまりくびれが明瞭ではない。

甕形土器（B1類）（7図-3）中形甕で器面に煤状炭化物の附着が著しく、頸部に簾状文が施文され、口縁部の波状文が平行に施文されるが、胴部の施文は、右上りに施文されている。これは、断絶痕の施文と同じく一面ずつ廻して施文したとしか考えられない。その他該期の甕形土器の破片が、多く検出されているが、前述の理由と時間的制約もあって割愛することとした。

高坏形土器（A類）（27図-4、2）丁寧に磨きされた上に、赤彩が厚く施され、坏部と脚部の接合部にヘソ状の突出がある。断定はできないが、刻期の古相の高坏に多い手法と思われる。上部下部とも欠損しているが、脚部は長く、坏部の口縁は水平に外反する形態を有すると思われる。

高坏形土器（C類）（29図-3、8）小形高坏で、頸部は凸帯を有し、外面は赤彩され器面の整形は良好である。この形態に、やや類似した高坏は、佐久市岩村田の餅田遺跡出土品⁶⁴にみられ、残存部も似ている。市内田上遺跡には、同形品があり、やはり残存部が類似する。従って共通した使用が考えられ、或いは祭祀供献後、破砕された疑いがある。高坏にはその他の形態の存在が考慮されるが、今回は資料に恵まれなかった。

蓋形土器（I類）（34図-3）外面は、赤褐色、黒褐色を呈する。胎土は、黒褐色をなしている。表面に刷毛目痕が残されている。末広りの器形の蓋形土器である。

外來系土器（I）小形壺形土器 安源寺遺跡宮裏出土（昭和41年調査）ソロバン玉状の胴部に附せられた口縁は、つよく外反し1唇は刻目で加飾され、胴上半に波状文が施文されて

おり、この土器は形態・手法上からも、東海地方からの搬入品と認められている。^{(6)・08}

外来系土器 (2) 高坏形土器 これは、安源寺遺跡の南縁下方、延徳低湿地の縁辺上の高見沢伴蔵氏宅地から出土したもので^{(6)・08} 脚部中央が、円筒形を早し段をつけて脚部が拡がり、段部下に円孔がめぐらされている。この形態の高坏は、石川県次場遺跡例などにみられる北陸経由のもので、法仏Ⅰ式から月影Ⅰ式期の所産と考えられ、北陸との交流が認められるものである。

第3節 古墳時代(土師第Ⅰ期)の遺物について

(1) V 期 御原敷式期

箱清水式土器の系譜上にある器種ほかに、外来系の土器が伴出する時期で、この期の箱清水系の文化は、伝統と保守性が強く、容易に解体されず、外来系土器も散見される程度だが、まず畿内地方で成立した古墳文化が、北信地方に波及しそれによって、箱清水式文化が確実に解体し、所謂「古墳時代の土師器」の概念に統一される古式土師器までの過渡期をV期として規定したい。

壺形土器 (B₁類1)(26図-4、9)SD2検出のもので、頸部から上の残存部を有する。口縁形態は、箱清水式の範形に無いもので、球形を呈する?胴部に口縁が、直立ぎみに立ち上っている。頸部には、模造T字文が描かれるが、以下は不明である。磨きの手法は同じだが、やや粗の面が見受けられる。

壺形土器 (B₁類2)(4図-3、2)SB1検出の中形壺形土器で、頸部から胴部が残存している。器厚は薄くよく磨ききされいる。器形は、球形を呈すると考えられ、頸部下に模造平行文と縷状文が、3連描かれている。思うにこの土器は、ハレの口などに使用された特殊な用途をもった土器でなかろうか。

甕形土器 (B₁類)(4図-3、1)SB1に近接して検出されたもので、下半部が失われている。短頸形をなし球形をなすと思われる乱れた波状文が描かれ、頸部に雑なT字文が、施されている。類例は牟礼バイパスA地点1・2号住居址(長野市若槻)出土品にみられる。⁰¹

甕形土器 (B₁類)(28図-3)SD5付近から検出したもので、上半部のみ検出で、(煮沸形態の甕は、やはり火熱をうける下半部が失われていることが多い)器形は、「提灯」を呈している。口縁部を後に接着させているためか復原接合作業が難渋した。器壁は薄く、口縁部は、直立からやや外反した形態である。模造文は頸部上では、平行線化して描かれ、胴部の波状文も波が小さく乱れている。この類例は、長野市松代町の四ツ屋遺跡9号住居址13出土土器⁰²で器台と長胴の素文の甕形土器を伴出している。

高坏形土器 (G₁類1)(26図-3、3)脚部が短かく正三角形を呈し、三角窓が3カ所にみられ、坏部口縁部が欠落しているが、半月状を呈すると考えられ、赤彩は、薄く塗彩

されている。脚部と坏部の破損面を観察すると、坏部が脚部から接合面が円形に剥離する。これを同じSD2検出の高坏(26図-4、11)と比較してみると、まず脚部のやや長い点と、坏と脚の接着が、従来からみられた、ヘソ状の突出のあることで、手法上の違いよりも、期古する様相の時期差と認めたい。このように比較すると、その変容がゆるやかで、これ以後「ヘソ状」の接合面をもつ高坏は、みられなくなる。

高坏形土器 (G₁類2) (26図-4、13) 無塗彩で、坏部の基部に稜が認められ、脚部は、前者に似ているが、円孔が3個認められ器面は、丁寧に磨研されており、この高坏もこの期の所産と思われ第3次調査(1976)のY1号住居址付近出土の高坏、C類⁰⁹に後続するものと思われる。

高坏形土器 (G₁類3) (25図-3) SD検出の脚部1/4の破片で、脚根部が大きく拡がる形態で、三角窓が6カ所、その中間に径1~2mmの穿孔が4カ所縦並列にあり、穿孔は、内側よりなされ、赤彩が厚くなされている。加飾か補修孔か、いずれも特別な用途(祭祀・葬送)が考えられる高坏である。

高坏形土器 (G₁類4) (26図-4、17) 坏部1/2の破片で碗形をなす。坏底部外面に稜をもっている。おそらく坏部より脚部の大きい小形の高坏で、明黄褐色で、焼成も良く塗彩されない。

高坏形土器 (C類1) (26図-4、8) 坏部のみが残存で、坏部直径が23cmを越す大形の高坏で、明黄褐色で焼成は、脆弱である。器壁が薄く坏底部外面の接合部に稜をもってくる。口唇部の形態は、外側より強くおさえて、円みをなしている。内面は縦方向に、外面は、横方向に飽磨きされている。

高坏形土器 (B類1) この高坏は、脚部と坏部の接合部の破片である。大きな坏に細い脚の接合部が附し脚は、大きく開くと思われる。燻色の器色で、よく研磨されている。破断面を観察すると、化粧土を上塗して器面を整形し、下地は櫛齒状工具で整形されている。外米系の高坏と思われる。

高坏形土器 (C類1) (26図-4、10) 直径24cmを測る半月形の坏部で、脚部は欠落している。明黄褐色の堅緻の焼成だが、坏内部に2次焼成痕がある。口唇部は、半円形をなし、脚部との接着は、僅かの凸部をなし脚も比較的細かったらしい。この時期は、箱清水式の高坏の塗彩にみられた厚化粧したものでなく、赤彩も薄くなされている。塗彩と無塗彩の2種がみられる。

器台形土器 (A類1) (29図-3、5) 白褐色を呈した器台で一見して搬入品と認められる。刷毛痕が、坏内部は横方向に坏別表面と脚部は、縦方向に施され、脚内部は横方向である。頸部に刷毛目と同じ工具で横方向に浅く平行線をめぐらせて下部に2本組の列点文を

等間隔にめぐらせている。脚部の孔は三ヶ所にみられる。このような脚部の長い形態の器台は、石川県金沢市南新保D遺跡出土品⁶⁴にもみられ、月影Ⅱ式期の所産とされている。だがこの器台の出自は、前述の如く北陸経由とは考えにくい。

装飾器台形土器（D類）（30図-3、1・5）器受部の小破片で、台部と水平に接合面で剥離している。円孔が2段に認められ、孔は内1.3cm、外1cmで、内側より焼成前に穿孔されたものである。内外とも良く研磨され、赤彩も厚く施されている。これも胎土焼成よりみて外来系の土器と認められ、このような円孔をもった装飾器台は、北信では、上山田町御屋敷遺跡防例⁶⁵などで、類例は当地方では少ない。本例のような、器受部に円孔が、2～3段設けられる例は、石川県竹松遺跡例があり、月影式期の所産と考えられており、本例も北陸方面に系譜が求められると考えられる。

手埴り形土器（C類）（26図-5、19）胎土に鉄分を多く含んだ（在地系？）の土器で、赤褐色を呈し、底部に大きく焼成時の黒斑を残す、内面は、不整面で、2次焼成痕を残すし、底部は中凹みで、底面を指頭圧によって作製し刷毛目痕がめぐっている。

上半部は失われ、その接合面の剥離痕が良く観察される。接合面下に複合の擬貝腹縁文（連弧文、施文具は、貝とは断定できない。18連で1周）口縁部の口唇角部を中心として、「ハ」状に擬貝縁文が刺突されている。破断面の口縁部径は、円周の1/4を占めている。この手埴り形土器は、千葉県などで類例が増加の傾向だが、群馬県・長野県あたりが東国の限界で、県下では、恒川遺跡（A類型の古段階？）、松本弘法山古墳、（C類型の新段階）本例、（C類型の最末段階⁶⁶）が、管見される県下の例で、安源寺例は、最北端例となっている。この手埴り形土器は、器台形土器の分布圏と一致しており、弘法山古墳例の如く、祭祀に用いられたと考えられ、畿内の祭式が、東日本に波及した結果がもたらされたと考えられ、畿内第5様式に発生した手埴り形土器が、信濃の奥深くまで波及するには、どのような経過がたどれるが興味深いことである。なお、本例を復元すると覆いに幅広の鈎がつく型と思われる。

（C）寺中遺跡「畿内に於ける古式土器の出土と北陸系土器」文獻64

2) Ⅳ 期 十 期（土師Ⅱ期前葉）

この該期は、SD2の託述の資料を除いた大部分の提示した土器を該当せしめて考えたい。これは、1976年調査のHA号址出土品とほぼ同時期と認定されるものである。

壺形土器（F類A）（26図-5、24）口縁部が、胴部より倍増した器厚で、整形は、やや粗略である。口唇は、強い横ナデによって、面を作り出している。口縁部の破片のため全容は不明の中形壺である。

壺形土器（F類B）（16図-4）

中形壺の口辺部の小破片で、焼成は脆弱である。口辺部外面に大きな面を作り出し内面は内湾しながら鋭角をもって口縁部を作り出している。

埴形土器（C類）（26図-5、25）小形壺の1/4程度の残存で、底部の形状は不明で

ある。器面の整形は、粗略だが、口頸部は、横方向に強くナデられ、口辺部に稜を作り出し、やや内湾して立ち上がった口縁は、先端部が鋭角をなしている。

埴形土器（E類A）（26図-5、18） 小形壺の口頸部1/4の残存部で、刷毛目痕が、表面に刷毛痕が僅かに残っている。口唇は丸く造型されている。

埴形土器（E類B）（26図-5、20） 口辺部が直立した形態の水形壺で、1/3程残存する。器面に不整形の箇所がみられ、口辺部は、直立して口縁が僅かに外反している。頸部に接統痕がみられる。

埴形土器（E類C）（26図-5、23） 一部に欠失箇所がみられるが、全形の知れる小形壺形土器で、底部を作り出し底面は平坦である。胴部のふくらみは弱く、口辺部は、直立して内面に役を作って肥厚させている。口縁部は、内面からのカーブで終結させている。底部には、煤状の炭化物が附着し、頸部にみられる、擦痕は、伴出の単純口縁の付台寛の手法と似ている。この直口縁壺形土器の類例は、群馬県邑楽郡大泉町御正作2号周溝基川土品²⁹に類似し、本例は底部が丸底化していない段階なので、先行形式と考えられる。

埴形土器（D類）（26図-5、22） 小形有段口縁壺で、口縁部が1/2欠損する外完形品である。赤褐色を呈する堅緻な焼成で、器面には刷毛目痕が残されており、内面には、不整面がみられる。底部は東日本型で凹部を有し丸底形ではない。口縁部は直上して外面はやや内折して終わる。内面底部と外面下半部の1部に煤の附着をみる。

埴形土器（A類1）（31図-4、2） 直口縁長頸小形壺で、球形の胴部に口辺部が内傾しながら直立し口唇部は、内側より面とりされて鋭角状を呈する。底部は、僅かに凹みを有する。口辺部は縦に、胴部は横方向に飽磨きされている。赤褐色・明黄色を呈し、口縁が直口形態に変形している。

この壺は、長野市四ツ屋遺跡30号住居址出土品²⁹（塗彩されている）の後出的な壺である。

埴形土器（B類）（26図-4、7） 球胴形の小形壺で、胴下半部の収縮が急で、底部は僅かな凹部を有する。口縁部は、欠損して不明である。黄褐色を呈する堅緻な焼成の土器でナデ調整で作られている。

これと似た形態の上器は、長野市四ツ屋9号住居址²⁹にみられる。

壺形土器（B類1）（26図-4、15） 球胴形を呈し口縁が「く字状」に外反する大形壺で、底部は平で、頸部と胴部の接合面で折損している。器色は、明黄褐色で、器面は、ナデ整形で均一である。関東地方に多いタイプの壺である。

壺形土器（B類27）（30図-3、4） S字口縁付台寛と同じ溝から検出されたもので内面は、刷毛目整形の上飽磨きされている。外面は刷毛目整形のままである。黄褐色の上器で、下半部に煤が附着する。口縁形態から、在地系の壺と思われる。

壺形土器（C類）（19図-4、1・2） 図上復元した土器で、口縁部は失われている。器の内外面とも飽鏡工具で均一に整形されている。暗黄褐色を呈して、焼成は脆弱である。

甕形土器 (B類1) (26図-3、5) 明黄褐色を呈する堅緻な焼成の大形甕形土器で、外面と内面口縁部は、刷毛整形が施され、内部は、ナデ整形されている。外面は口縁部が縦方向、胴部は、横乃至斜方向に刷毛目整形されている。底部は凹みを有する。この類別は、牟礼バイパス(長野市岩根) A地点2号住居址出土⁶⁰⁾の甕形土器に類似しているが、口唇形態と底部に違いがみられる。

甕形(S字口縁台付)土器 (A₂類A) (29図-4、9) 口縁部1/2程の破片で、黄褐色を呈し金雲母がみられる、薄い堅緻の焼成の土器で、搬入品である。内面はナデ整形だが外面は、刷毛目整形が、針状に均一に行われ、後に横方向に施されている。口縁端部が、丸く薄くつよく外反している。

甕形(S字口縁台付)土器 (A₁類B) (30図-3、1) 安定した逆壙形の台に「燕」形の煮沸部をのせている。S字口縁の1段は、外からの押えによって三角形を呈し、2段は極めて薄くつられて外反している。内面の刷毛整形は、左から右へ斜状に回転させながら下から上に施され、外面脚部はナデ整形で、煮沸部は下から上に即ち倒立して左から右に刷毛目整形が肩部まで施され、上半部(肩部)は正位で、矢羽状に交差して施され、さらに横方向に頸部から肩部にかけて施されている、底部に煤が附着する外、明黄褐色の極めて堅緻の土器で、搬入品である。

以上2例が今回検出したS字口縁台付甕である。この土器は、既述の如く安源寺遺跡では、外来系土器であることは誤りなからう。だが、注視されるSD2・SD5の溝状遺構からは伴出せず、SD6・SD7から1個体ずつ検出されている。赤塚次郎(1189)⁶²⁾このA₂類Bの台付甕はA系統(濃尾平野)2段階、B型口縁上段押圧面あり、体部上半外面ヨコハケ上位から下位へ・屈曲内面ヨコハケ・工具ナデなどの特徴のみられるもので、濃尾平野からの拡散期に相当するとされている。これに対しB系統は、毛野・駿河地域にみられる変化した形態で、形態が長胴化を指向し口縁部外面にヨコナデが早くから採用されるなどの特長があり、毛野地域では、東海西部からの移住者集団によって石田川式土器の成立をみたとの尾崎喜左雄氏の論考は著名である。

甕形(単純口縁台付)土器 (A₂類A) (26図-3、2) 逆壙形の台に最大幅が上半部にある器形で、口辺部が幅広く「く」字状に外反している。器面内部は、ナデ整形され、口縁は横方向に、外面は横・斜状に削りと叩きの技法で整形されている。赤褐色を呈し2次焼成痕がみられ剥落した部分もある。口縁の外反は、直立きみで、口唇は平に面を作っている。この台付甕の類型は東海から関東地方の広範な地域に亘って分布している。

甕形(単純口縁台付)土器 (A₂類B) (26図-3、1) 溝の底部近くに埋っていたこの期とすれば小形の台付甕土器で、黒褐色～赤褐色の胎土が精選された堅緻な土器で、スマートな器物をなし、口縁部の外反はゆるやかである。内面はナデ整形されるが、口縁内側と外面は、刷毛目整形されている。下部に2次焼成痕と全面に煤が附着している。また口唇

は、面取りが施されている。この土器の出目も前者と同様である。

壺形(単純口縁台付)土器 (A₁類C) (22図-4) SB9の住居址から検出されたもので、同材質の台付甕の口縁部破片をSD2から検出している。灰白色を呈する土器で煤が附着し、2次焼成痕と剥落部が認められる。球形で、台付部にややのびて接続している。台は逆塊形を呈する。口縁は「く」字状に外反し口辺部から口唇部に漸減して、内側より円く終結している。内面はナデられ、外面は刷毛目を残している。この土器は搬入品と思われる。

壺形(単純口縁台付)土器 (A₁類D) (26図-3、14) 赤褐色・黒褐色を呈する上半部の残存で、他に同類の土器片がみられたが、接合できなかった。台付甕をなすと思われる球形で、口縁がやや強く「く」字形に外反し、先端は丸くカーブして、口唇の形状は半円形を呈する。内面の整形は、不整形で、口縁部内側は横方向にナデられ、外面は刷毛目痕が顕著である。器厚は前者に比べて厚く、胎土には鉄分粒も多くみられ、在地産の甕と思われる。

壺形(単純口縁台付)土器 (A₂類E) (26図-3、6) 器壁の薄い焼成の良好な土器で、球形をなす、台付甕と思われる。口縁が丸く内湾しながら「く」字形に外反しており、器面の整形はナデで良好である。器色は灰白色で、外来系の土器と思われる。安源寺の当該期の台付甕を今回の出土品でみ限り、御尾敷遺跡例でみられた如くS字甕が先行した確証はなく、むしろ逆か、或いは、単純口縁甕が、先行したかとも思われるのは、SD2の検出層位からも窺える。これらの検証は、今後の課題だが、煮沸効率の良い、容量の大きい煮沸器が登場する社会の背景の究明が求められる。

(注) 甕形土器の用途については、私は米の蒸器だと考えているが、用途は「酒造用」との考えを支持している。

壺形土器 (G類A) (32図-4、7) 箱清水式の末葉段階にみられる器形を呈し、口縁の外反度はずよく感だられ、勿論、文様は喪失している。赤褐色の堅緻な焼成で、ヘラでナデたり削られたりして整形されている。平底で胴部に楕円形で長径2.4cmの穿孔が、焼成後に施され、飯器の使用が考えられる。

壺形土器 (G類B) (26図-4、12) 溝の最下部より検出された小形土器で、これも箱清水式の系譜上の土器である。灰褐色を呈し器面には、煤の点滴と底部に赤褐色の2次焼成痕がみられる脆弱な焼成の土器である。口唇は丸く整形をナデで行われ、今後の検討によって1段階期古させる土器である。

壺形土器 (B₁類A) (26図-3、4) 中形の甕形土器で、器形は、前者には類似するが、細部には、多く違いがみられる。赤褐色を呈しやや堅緻な焼成の土器であり、1. 口唇部が面とりされる。2. 内面が整形後きれいにナデられ、外面はササラ状工具で削られている。3. 従って上から削られた生地で、底部外面が輪状を呈して凹部をなしていることなどが指摘され、土着と外来が混在した土器である。

壺形土器 (B₁類B) (32図-4、5) この土器の特徴は、口縁部に折り返し状(或い

はベルト状)の肥厚帯のあることで、口縁が短い、箱清水式系譜の土器に似ているが、白褐色をした堅緻な焼成の土器で、胎土よりみて在地(安源寺)の土器と認めがたく、内面篋磨き、表面ナデた調整で、煤が附着し、底部は火熱痕がある。このような手法上の違いを検討すれば、(G類B)の土器と同じく、1時期先行するかも知れない。

高坏形土器 (G類) (28図-2、2) 坏部は失われている。胴が大きく開いた形式で表面は、刷毛目整形後に研磨され脚内は刷毛目痕を残す。3孔は、外側より穿孔されている。色調は、明黄褐色である。

蓋形土器 (A類) (30図-3、3) 明黄褐色の器色で、やや脆弱な焼成で、表面は刷毛目整形痕が残っているが、内部は不整形で、篋による整形痕が残っている。つまみが大きく中央部が大きく凹んでいる。

器台形土器 (A類) (31図-4、3) 外面に縦方向の刷毛目痕がみられ、内面はナデ整形されている。脚部の円孔は、器受部近くに4個みられ、器受部中央に貫通孔があり、器受部I唇は面とりされて、北陸出日の系統と思われる。なお、器受部に明赤褐色を呈する部分があり、2次焼成痕が認められる。この器台は、千葉県神門4号墳出土¹⁰⁾の器台に類する。なお、第3次調査時の報告書第43図49の器台は、器受部I唇、脚部先端に凹線文のみられるものでこれをA₁類として考えたい。

器台形土器 (A₃類) (26図-5、16) SD2の唯一の器台で、明黄褐色を呈し、器受部は赤褐色の2次焼成痕がみられる。器受部外面に2/3のところより稜をもって立ち上がっている。器受部から脚部中程までに径8mm程の穿孔があり、3孔の下は開脚して中空となっている。堅緻の焼成で、良くナデられている。

鉢形土器 (A類) (30図-3、2) 白褐色で黒褐色のみられる土器で、口縁部がやや内湾しながら立ち上がり、口唇は僅か面とりが行われている。器面には、刷毛目状の擦痕が残る。

片口形土器 (A₁類) (29図-3、6) 明黄褐色の堅緻な焼成の土器で、内面は刷毛目整形後、ナデられている。外面は刷毛目整形痕を残す。底部は僅かの凹を作っている。片口個所は、指頭が入る大きさに造られている。

大形甔形土器 (B₁類) (P69) 外面が赤褐色を呈する土器で、外面は刷毛目痕を残し、内面はナデ整形されている。上半部1/2程の残存で、この大形甔の出現は先述の酒造用と考えた場合、ふらの共同体の祭祀用の酒造用と推察すれば、その共同祭祀の究明などは、今後の検討課題である。



B Z表採 大形甔実測図

(3) Ⅶ期 十期(土師Ⅰ期後葉)

安源寺の当該期は、先期より漸移的な変遷をたどり、丸底の土器が定着する時期で、主にSD5の出土品を該当せしめたいと思う。甕形土器は、先期より僅かに長胴化の傾向にある。

甕形土器 (B₁類1) (28図-2、6) この土器は完形で検出された。器色は暗赤褐色を呈し外面に黒斑と煤が附着する。内面はよくナデられるが、外面上半部は、指頭と思われる凹凸面の上を細かい刷毛目整形を施している。下半部は、削りの手法である。底面は、比較的小さく作られている。

甕形土器 (B₁類2) (28図-2、3) 明黄褐色を呈し剥落部がある。口辺部内外は良くナデられるが、外は、削りの手法で底部はやや凹んでいる。器面には、煤が附着する。

甕形土器 (B₁類3) (28図-2、10) 長胴形を呈する器形で、明黄褐色を呈する。表面に刷毛目痕を僅かに残すが、後でよくナデられている。平底の底部は、上からの圧力でつくられた形態を有する。外面には煤の附着と2次焼成痕がみられる。

甕形(単純口縁、台付)土器 (A₂類) (28図-2、4) 明黄褐色の堅緻な焼成の土器で、大きな台に、甕形部をのせている。口縁は、僅か外傾しながら、外側は、円味を帯びている。内面に剥落部が僅かに残る。この種の土器は、祭祀用に使われた可能性が考えられる。

小形甕形土器 (F類) (29図-3、1) 丸底の小形甕で、外面に2次焼成痕と、煤が附着する。1部剥落あり、口辺部は内外横ナデされ、内面は縦状に刷毛目痕を残す。外面は胴中部まで、縦状の刷毛目で以下は削り手法で底部を作る。

2段口縁甕 (A₃類F) (29図-4、10) 器壁の薄い堅緻の焼成の土器の、口縁部の破片である。2段口縁はほぼ直立状に作られ、球形の胴部に接続している。

甕形(瓢形)土器 (A類A) (28図-2、8) このような瓢形を呈する土器は、阿島式の小形甕以来の伝統がみられるが、その甕形土器としての出現は、畿内第5様式に出現する。この器形の土器が、安源寺に流入したのは、先期と思われるが、その第二義的に作られたと考えられるのが、この瓢形土器である。その背景として身近に瓢箪を栽培していたことが考慮される。暗褐色を呈し、下半部に大きな黒斑部分がみられ、堅緻な焼成である。内面はよくナデられており、外面の胴部には、輪積痕の痕跡を有し縦状に甕でよく磨研されている。底部には、刷毛目痕が残り、底部の台は痕跡状で、僅かに凹んでいる。

甕(瓢形)土器 (A1類) (28図-2、7) 底部が失われているが、おそらくほとんど丸底で、球形形で、収縮した頸部から口辺部が、やや外反しながら立ち上がる。口唇は半円形を呈する。整形は、刷毛目の後、ナデ整形が行われるが、下半部は、刷毛目痕をよく残しやや脆弱な焼成の土器である。

甕形土器 (C類) (28図-2、5) 黒赤褐色を呈し内面は、黒色である。器面は、良く研磨されて、刷毛目痕は残さない。平底だが痕跡状である。

高杯形土器 (B類) (29図-3、3・7) 杯の破部分が大きい位置に存在する。即ち脚

部を作って平坦な円盤部を作った後、僅か内湾させながら大きく外反する器形で、このような特長から当該期に編入した。器色は、明赤褐色を呈し両者とも坏部先端に黒斑がみられる。短脚で大きく拡がり外側からの穿孔は、3個みられる。坏内部は、縦状に磨きされ、外面もほぼ縦状に研磨され、脚内部には僅かの刷毛目痕を残している。

器台形土器 (B類1) (29図-3、2) 明黄褐色を呈する卑級な土器で、縦状の刷毛目痕を僅かに残すが良く研磨されている。器受部は、盤状を呈し脚は太く短く3孔で、裾部が大きく開き先端は、平坦となっている。

器台形土器 (C類) (32図-4、2) 内湾して広がる脚部が特徴で、明黄褐色で脆弱な焼成である。器受部も壙形をなすと思われる。穿孔は、3個で内外よくナデ整形されたと思われるが表面が剥落して定かでない。

器台形土器 (B類2) (25図-3) 暗赤褐色を呈し堅緻な焼成で、検出された器台のうち、もっとも後出するものと考えられる。口縁部内外は円周状に、他は縦方向に磨きされ、穿孔は3個、外側よりなされている。

甔形土器 (A₃類) (29図-3、4) 内面が、赤褐色を呈するが、外面は、器面が荒れて2次焼成痕もみられる。内面は特に横方向に磨きされ、底部の穿孔は内より外になされている。製作技法などが、(同図3・7)の高坏と似ている。

なお甔形土器は、箱清水式以来あまり形式変化なく、赤彩されていない。

手づくね形土器 手づくね形は多種多様で、同定に困難だが、箱清水期のもの、SD3(16図-3、1)検出の底部の比較的大きなもの、SD2(26図-5、21)検出の古墳時代前期の内湾しながら外反する、壙形を呈するもの、SD5(28図-2、9)の黒色を呈する、底部上に僅かのくびれのある極小形のもので、古墳時代前期に属すると思われるものなどが検出されている。

以上が、注出した資料の概略な説明であるが、北信濃の古墳出現期の土器相の分析には、力及ばず、今後に残された問題は大きい。

SD2とSD5検出の土器群に相違点を求めて編年してきたが、調査の性格上規制された面があり、今後に寄せる期待が大きい。

また周辺遺跡との相関の究明も今後の課題で、今回新知見の資料を含めて、北信濃の古墳出現期の時代相にせまっていきたいと想っている。

第V章 結 語

長野県の弥生時代究明のそして箱清水式文化の研究の原点ともいべき安源寺遺跡は、学史上でも注目される遺跡で、今回の調査でも多く成果をもたらした。これらの成果をみると縄文時代中期初頭の遺物の検出から初まり以後、弥生文化定着時からの遺構が、着実に増加し、特に弥生後期から古墳時代前期の遺構・遺物が稠密に確認され、その時代背景が両期をなしていると考えられる。また、この地方の古式土器全般の調査が、進展しない今日、断定はできないが、弥生後期末葉から、古墳時代前期の人々が、このような高燥の台地に住まなければいけなかったのか、なぜ現在までに周辺に高塚古墳が築造されなかったのか、等々の疑問が湧いてくる。

まず、多数の溝状遺構の存在から、一集水施設として一周溝墓の溝として一防御用の周溝として一などと今後の検討課題が山積するが、同時期とみられる、新潟県新井市の斐太遺跡群・百両山・上ノ平遺跡に似た性格が、考えられる。これらの戦乱などを想定した転換期の土器群は、各地からの交流の土器⁶⁸出土にも裏付され、人とともに土器も動いた証拠となろう。これらは、安源寺Ⅴ期からⅥ期・Ⅶ期に該当し次のⅧ期・Ⅷ期になると台地のムラは拡散されて、中野平でも扇状地の末端から開拓されつつあったムラが、増大して新井大フロ遺跡のような祭祀址を伴うムラが出現し、周囲の丘陵上には、高塚古墳が築造されてくる。次の両期は、SB 14・SB 17の住居址にみられる平安時代の住居址で、6世紀後半に開始された。高丘陵地の須恵器焼造窯が、以後3世紀以上に亘って操業され、この丘陵にも再び賑いが戻ってきて、以後、中世の時代に入るのである。

なお、土器の変遷については、別に章を設けて論ずべきであったが、時間の制約と、筆者の無能にたたられてできなかった。いづれ別稿を用意したいと考えている。今回の調査に当って、諸々御援助をいただいた多くの方々に深謝申し上げると同時に、有意義な御示教をいただきながらそれを生かしきれなかった点を反省しながら、笹沢浩氏を初め諸先学に感謝申し上げ稿を終わりたい。

(金井汲次・檀原長則)

参 考 文 献

- (1) 小野勝年 「下高井地方の考古学的調査」『下高井』 1953
- (2) 八幡一郎 「縄文式土器の人物意匠について」『考古学雑誌』41-4 1956
- (3) 太田文雄 「北信濃の弥生後期編年について -田草川尻遺跡出土土器を中心として-」『信濃』Ⅲ 32-4 1956
- (4) 臼井武正 「佐久地方出土の後期弥生式土器について」『信濃』Ⅲ 32-4 1957
- (5) 田川幸生 桐原健 「長野県安源寺遺跡の弥生式土器」『信濃』Ⅲ 14-4 1962

- (6) 中野市教育委員会 「安源寺—中野市安源寺遺跡緊急発掘報告」『長野県考古学研究報告書』(2) 1967
- (7) 南 和久 「北陸の縄文中期にみられる連続刺突沈線文について」『石川考古学研究会誌』20号
- (8) 笹沢 浩 「箱清水土器発生に関する一試論—善光寺平における後期初頭の弥生式土器の設定と意味するもの」『信濃』Ⅲ 22—11 1979
- (9) 中野市教育委員会 「安源寺Ⅱ—安源寺遺跡第3次発掘調査報告書」 1979
- (10) 桐原 健 「信越国境間交流についての考古学的所見」『信濃』Ⅲ 32—12 1980
- (11) 長野市教育委員会 「浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスA、E地点遺跡— 1982
- (12) 『長野県史』考古資料編 全一巻北東信 1982
- (13) 谷内尾晋司 「北加賀における古墳出現期の土器について」『石川考古学研究会誌』26号 1983
- (14) 星 龍象ほか「信濃の弥生式土器から土師式土器への変遷過程」(1)・(2)『信濃』Ⅲ 35—5・7 1983
- (15) 千曲川水系古代文化研究所ほか 「古墳出現期の地域性」第5回3県シンポジウム 1984
- (16) 古墳時代土器研究会 『古墳時代土器の研究』 1984
- (17) 南 和久 「北陸の縄文時代中期の編年」『南 和久著作集』第1集他9編 転形書房 1985
- (18) 岩崎拓也 「古墳出現期の一考察」『中部高地の考古学』Ⅲ 1984
- (19) 青木和明 「箱清水式土器の編年予察」 長野県考古学会誌 1984
- (20) 数野雅彦 「北陸土器研究序説—縄文時代中期前葉の編年対比を中心として」『山梨考古学論集』 1984
- (21) 花岡 弘 「土師器の成立と古墳時代—古代」『歴史手帖』 1986
- (22) 笹沢 浩 「箱清水式土器の文化圏と小地域—地域文化圏の動静をさぐる—」『歴史手帖』 1986
- (23) 第3回東海埋蔵文化財研究会 「欠山式土器とその前後」 1986
- (24) 石川考古学研究会シンポジウム 『月影式土器について』 報告編 1986

第2表 縄文土器観察表 (第41図)

番号	器種	部位	系統	色調	焼成	山土地点	備考
1	深鉢	胴中部	北陸系(土着)	黄黒褐色	堅	BZ-16	樹枝状縄文、竹管文
2	"	胴下半	"	赤褐色	"	A-3-3	浅い竹管条線
3	"	口縁部	"	黒褐色	軟	A-4-2	隆起線瓦、交互に押捺の点列文
4	"	胴部	中部山岳系	"	堅	BY6柱	縦位の縄文
5	"	"	北陸系(土着)	赤褐色	"	A-11-2	R〔 $\begin{smallmatrix} \text{L} \\ \text{R} \end{smallmatrix}$ 〕縄文
6	"	"	"	"	"	A-3-3	隆起線間刻み目
7	"	胴下半	"	明黄褐色	"	BX-18	R〔 $\begin{smallmatrix} \text{L} \\ \text{R} \end{smallmatrix}$ 〕縄文
8	"	上半部	"	内白褐色 外赤褐色	"	BY-14	" 顔面土器下層
9	"	胴下半	"	黄褐色	"	BX-18	" 竹管平行文
10	"	口縁部	"	"	"	BZ-8	" 結節縄文
11	"	胴部	"	暗黄褐色	"	B-1-1	"
12	"	胴上半部	"	赤褐色	"	BY-4	隆起線間 刻目文
18	"	胴部	"	内明黄褐色 外赤褐色	"	B10-2	R〔 $\begin{smallmatrix} \text{L} \\ \text{R} \end{smallmatrix}$ 〕縄文 結節縄文
14	"	"	"	内明黄褐色 外明黄褐色	"	BY-14	隆起線文 円形文
15	"	"	"	内明黄褐色 外赤褐色	"	A-4-2	竹管平行文
16	"	"	"	黒褐色	"	A-3-2	L〔 $\begin{smallmatrix} \text{R} \\ \text{L} \end{smallmatrix}$ 〕縄文 隆起線上も施文
17	"	"	"	内暗黄褐色 外赤褐色	"	BY-1	"
18	"	"	"	内黒褐色 外赤褐色	"	A-11-2	R〔 $\begin{smallmatrix} \text{L} \\ \text{R} \end{smallmatrix}$ 〕縄文
19	"	上半部	"	明赤黄色	"	B-1-1	隆起線間に半隆起線で縦位平行施文
20	"	口縁部	"	明褐色	"	B-10-2	隆起線間に半隆起線で三角状に施文
21	"	"	"	暗赤褐色	"	BZ-1-8	平行竹管文間に左傾の竹管条線文
22	"	"	"	明黄褐色	"	A-2-4	竹管平行文、斜状竹管条線点列文
23	"	"	"	暗黄褐色	"	BX-8-9	半隆起線間横杉状沈線
24	"	"	"	明黄褐色	"	A-11-2	半隆起線間に格子状竹管文上から施文
25	"	上半部	"	"	"	A-4-2	同じ竹管原体による横位施文
26	"	"	"	明黒褐色	"	B-1-1	隆起線間、半隆起線縄文充填
27	"	"	"	明黄褐色	"	BY-7	横走の基隆起線上に半隆起線
28	"	胴部	"	暗赤褐色	"	BX-8	隆起線上に斜状竹条線 下に厚状文 伏文沈線あり
29	"	"	"	黄褐色に 黒褐色部分	"	A-1-7	継ぎ文の1種 隆起線上 沈線あり
30	"	"	"	黒褐色	"	A-6	U字状文の変形、胎土白色物あり
31	"	"	"	明黄褐色	"	A-3-3	U字文の1種
32	"	上半部	"	赤褐色 黄褐色	"	BY-11	窓枠状隆起線

番号	器種	部位	系統	色調	焼成	出土地点	備 考
88	深鉢	腹部	北陸系(土着)	明黄褐色	堅	A-4-8	半隆起線間 点列文 RS ₇ 刺文(半 隆起線文)
84	"	口縁	"	赤褐色 暗褐色	"	A-4-8	隆起線窓枠半隆起線単節刺文
85	"	上半部	"	明黄褐色	"	BY-14	隆起線窓枠状U字伏文
86	"	口縁部	"	"	"	BX-18	耳状の把手
37	"	上半部	"	"	"	BX-17	隆起線間連刺文
88	"	口縁部	中部山地系	暗黄褐色	"	BZ-16-17	楕円枠 ベン先状刺突文
89	"	上半部	"	赤褐色	"	A-2-5	"
40	"	胴部	土着系	"	"	BY-14	指圧痕文(しこう文)
41	"	上半部	北陸系(土着)	灰褐色	"	BX-10	隆起線による楕円状文?
42	"	"	"	黒褐色	"	B-1-1	隆起線 半隆起線 点列文
48	"	口縁	"	赤褐色	"	BZ-16 溝	隆起線間 点列交互
44	"	"	"	黄褐色	"	A-2-2	隆起線間 刻目文
45	"	"	"	黒褐色	"	BX-8	隆起線上刻目 半隆起線点列文
46	"	"	中部山地系	黄褐色	"	B-1-1	竹管文と粘土組による跑文
47	"	胴部	北陸系	暗黄褐色	や>軟	BY-7	B字状文間平行沈線
48	"	"	"	外黒褐色 内黄褐色	堅	BY-14	竹管平行線 格子状沈線
49	"	口縁	北陸系(土着)	黄褐色	や>軟		口縁R ₁ 刺文 隆起線下交互点列
50	"	上半部	"	明黄褐色	堅	BY-18	隆起線 V字形刻目文 竹管交互押線
51	"	"	"	明黄褐色	"	BX-18	楕円状隆起線 半隆起線
52	"	口縁	"	暗灰褐色	軟	BX-11	胎土白色粒多量 鏝による隆起線
53	"	胴部	"	明黄褐色	堅	BX-18	隆起線連続刻目文 沈線
54	"	"	"	黄褐色	"	BY-11	継手文(鳥巻) 隆起線
55	"	"	"	黒褐色	"	A-8-8	継手文 半隆起線 半隆起線
56	"	口縁	"	"	"	表 採	継手文の隆起線 横走の半隆起線
57	"	胴部	"	赤褐色	"	A-4-2	隆起線上に刻目文
58	"	"	不明	白褐色	"	BX-18	条線と突刺文
59	"	口縁	北陸系(土着)	明黄褐色	"	A-9-8	半隆起線間 刻目文
60	"	腹部	"	赤褐色	"	A-8-8	隆起線上刻目文
61	"	上半部	中部山地系	"	"	BX-16	縦位円形突起 連続刺突沈文
62	"	胴部	土着系	明黒褐色	"	B-1-1	隆起線上連続刻目文
63	"	口縁	"	黄褐色	"	A-5-8	口縁中に8段に連続C字文外系文
64	"	胴部	"	"	"	BY-6生	疎のI ₁ 刺文 中期末?

番号	器種	部位	系統	色調	焼成	出土地点	備考
65	深鉢	胴部	土着系	白褐色	窯	BY	疎のL(Ⅱ)縄文中期末
66	"	"	"	外赤褐色 内黒褐色	"	A-8-8	"
67	"	口縁	"	赤褐色	"	BY-11	外素文 口縁内側竹管条線
68	"	胴部	"	黒褐色	"	BY-13	疎のR(Ⅱ)縄文
69.71.72 73.75.76	"	口縁	加藤利巳系 (土着)	"	"	A-3-3	口縁T字状肥厚 燃系文
70	"	胴部	土着	白褐色	"	"	燃系文
74	"	"	"	黒褐色	"	BX-18	R(Ⅱ)縄文

弥生土器・須恵器観察表 (第44図)

番号	器種	部位	系統	色調	焼成	出土地点	備考
1	壺	口縁	栗林	黄褐色	窯	B-8-5	磨消縄文 笠沈線口 龜文
2	甕	胴部	"	黒褐色	"	BZ-16	条痕状 竹管D字文
3	壺	肩部	"	暗褐色	"	"	磨消縄文
4	小形甕	口縁	"	赤褐色	"	BX-18	口唇の刻目文
5	壺	頸部	"	黄褐色	"	BZ-8	山形沈線 磨消縄文
6	蓋	"	"	白褐色	"	BZ-16	2孔対 磨消縄文
7	甕	上半部	栗林?	黒褐色	"	B-2-7	コノ字重ね文 施文原体逆に使用か
8	壺	"	"	"	"	B-8-4	磨消縄文
9	甕	口縁	"	黄褐色 黒褐色	"	A-2-2	口唇縄文 4本組櫛描 壺状 斜状
10	"	"	"	赤黒色	"	A-9-1	口唇縄文 条痕状施文が被杉状
11	壺	肩部	"	黄褐色	"	B-9-9	竹管D字文 円形文 幾可学文
12.19	"	"	"	灰褐色	"	BZ-16	竹管D字文 山形文
13	"	口縁	"	黒赤褐色	"	BX-16表	口唇施文 複山形文
14	甕	胴部	"	黒色	"	BX-18	縦位沈線
15	壺	肩部	"	黄色	"	B-1-1	山形沈線
16	"	頸部	"	黒色	"	"	平行条線文 磨消縄文
17	甕	胴部	"	暗黄褐色	"	BY-17住	格子目 櫛描条線文(5本)
18	"	上半部	"	暗黒黄色	"	B-8-8	口唇縄文 櫛描条線壺状文 羽状条線文
20	"	口縁部	須恵器	黒青色	"	B-4表	表叩き目、内ハケ目 整形痕

第3表-1 土器類 表(1)

発出 番号	発出 場所	数量 (個)	形状上の特徴(平面上)	白土	構成	色	内	外	遺蹟名 出土地	時期	備考
1	4	1	口縁1内へ横1が本 胴一帯は 外へ横1が本 T字文	石灰質・鉄分混少	製	黄褐色・灰青	西	西	SD-2	赤土	口縁部と胴上部分のみ 1/3残存
2	4	1	上へ一帯状文 胴部(短) 下帯 波彫	鉄分混・砂粒少	製	赤褐色・上層赤	西	西	SB-1	赤土	胴上部分のみ 1/3残存
3	81	2	口縁部3帯状文 4分割付目 底打磨立と本帯彫目し織文	砂粒混・鉄分混少	製	黄褐色	西	西	SD-2	赤土	内層部分の帯彫と胴部3帯彫のみ残存
4	25	15	胴文 取毛直 横ナゲナ	鉄分混少・石灰混少	製	黄褐色・赤褐色	西	西	SD-2	赤土	底へ横ナゲナ
5	1	1	ヘタ1が本高文 竹管の列織文	石灰質・鉄分混	製	黄褐色・赤褐色	西	西	SD-2	赤土	2次焼成済 二層器 1/3残存
6	24	1	内へ帯彫 横ナゲナ 外へ横ナゲナ	鉄分混・石灰混	製	黄褐色	西	西	BY2	赤土	胴上部分に上帯
7	15	1	内へ帯彫 横ナゲナ 外へ横ナゲナ	鉄分混・石灰混少	製	黄褐色	西	西	SD-20	赤土	上帯赤土 胴部1/3残存 底打磨立と本帯彫付
8	2	2	内へ帯彫 横ナゲナ 外へ横ナゲナ	鉄分混・石灰混少	製	黄褐色	西	西	SD-20	赤土	外へ一帯彫 内層赤褐色 胴部1/3火傷
9	19	1	平帯 刃状彫刻へタ1が本 又復々なし	鉄分混少	製	赤褐色	西	西	SD-8	赤土	製成不可 横ナゲナ
10	2	2	内ナゲナ 底平削織	鉄分混少・石灰粒	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	内ナゲナ 横ナゲナ
11	28	8	ヘタ1が本 上へ横ナゲナ	鉄分混・石灰粒	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	口縁部彫刻付
12	16	1	二層文 胴部彫刻付又は波状文 底打磨立	鉄分混少・石灰粒	製	黄褐色	西	西	SD-16	赤土	2次焼成済 口縁部1/3残存
13	23	15	胴部横ナゲナ少し	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	上帯赤土 1/3残存
14	28	2	口縁部 不彫出 口縁部横ナゲナ 内面口縁 横ナゲナ	鉄分混・砂粒	製	黄褐色	西	西	SD-2	赤土	下帯赤褐色
15	29	20	口縁部横ナゲナ少し	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-9	赤土	胴部赤褐色
16	14	2	口縁部横ナゲナ	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	胴部赤褐色
17	29	10	口縁部横ナゲナ	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-9	赤土	胴部赤褐色
18	40	9	口縁部横ナゲナ	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	胴部赤褐色
19	26	7	口縁部横ナゲナ	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	胴部赤褐色
20	22	5	口縁部横ナゲナ	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	胴部赤褐色
21	29	5	口縁部横ナゲナ	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	胴部赤褐色
22	7	7	口縁部横ナゲナ	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	胴部赤褐色
23	81	2	口縁部横ナゲナ	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	胴部赤褐色
24	25	25	口縁部横ナゲナ	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	胴部赤褐色
25	5	5	口縁部横ナゲナ	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	胴部赤褐色
26	4	4	口縁部横ナゲナ	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	胴部赤褐色
27	24	8	口縁部横ナゲナ	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	胴部赤褐色
28	1	1	口縁部横ナゲナ	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	胴部赤褐色
29	7	1	口縁部横ナゲナ	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	胴部赤褐色
30	27	3	口縁部横ナゲナ	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	胴部赤褐色
31	27	3	口縁部横ナゲナ	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	胴部赤褐色
32	28	1	口縁部横ナゲナ	鉄分混	製	黄褐色	西	西	SD-8	赤土	胴部赤褐色

第3表-2 土器観察表(2)

番号	通年	時期	瓦量 (cm)	瓦面上の特長(手痕上)	胎土	質点	色	質	透視	時期	備考
35	4	1	17.6	新瓦目分厚(厚薄)5分、約10mm間	粉粒、砂粒	中々軟	暗茶褐色	同 左	SD-1	灰生	2次焼成有 輪彫有
36	8	1	14.5	口縁内縁有ナド 外縁有ナド	石灰	硬	灰黄色	同 左	SD-1	有式土師	2次焼成有 上部1/3焼成
37	12	1	15.4	4.4 17 ナラヒ有	石灰	中々軟	灰黄色	同 左	SD-2	灰生	厚薄2次焼成
38	5	1	17	中々軟工具、口縁有ナド高気化ナド	粉粒多	中々軟	灰黄色	同 左	SD-2	灰生	灰化有
39	26	1	7.2	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-2	灰生	口縁有1/3焼成
40	26	1	4.4	4.4 22.4 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-2	灰生	口縁有1/3焼成
41	40	1	15	外縁有ナド、口縁有ナド	粉粒多	中々軟	灰黄色	同 左	SD-2	灰生	厚薄2次焼成
42	10	1	18.2	厚薄、口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	中々軟	灰黄色	同 左	SD-2	灰生	厚薄2次焼成
43	10	1	25.5	厚薄、口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	中々軟	灰黄色	同 左	SD-2	灰生	厚薄2次焼成
44	29	1	11.6	11.8 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	中々軟	灰黄色	同 左	SD-2	灰生	厚薄2次焼成
45	9	1	17	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	中々軟	灰黄色	同 左	SD-2	灰生	厚薄2次焼成
46	2	1	11.8	5.2 18 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	石灰質、全焼成	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう
47	2	1	18.6	5.2 18 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	石灰質、全焼成	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう
48	1	1	26.5	厚薄、口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう
49	2	1	14.6	5.2 18.2 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう
50	2	1	18.6	5.2 18.2 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう
51	14	1	18	厚薄、口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう
52	1	1	17.6	11.4 32 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう
53	2	1	17.6	11.4 32 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう
54	2	1	17.6	11.4 32 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう
55	2	1	17.6	11.4 32 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう
56	2	1	17.6	11.4 32 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう
57	2	1	17.6	11.4 32 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう
58	2	1	17.6	11.4 32 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう
59	2	1	17.6	11.4 32 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう
60	2	1	17.6	11.4 32 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう
61	2	1	17.6	11.4 32 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう
62	2	1	17.6	11.4 32 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう
63	2	1	17.6	11.4 32 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう
64	2	1	17.6	11.4 32 口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう	粉粒多	硬	暗茶褐色	同 左	SD-6	有式土師	口縁有ナド、口縁の内面は面筋のよう

第3表--3 土器観察表(3)

通号	通名	法量 (cm)	形上の模様 (平面上)	土質	形式	色	透	構造	時期	備
65	2	17.9	へうがね 赤線ナゲ 腹縁部 腹内へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	腹	赤紫	赤紫	SD-4	腹縁部 腹内へうがねナゲ	腹縁部 腹内へうがねナゲ
66	2	17.9	へうがね 赤線ナゲ 腹縁部 腹内へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	腹	赤紫	赤紫	SD-4	腹縁部 腹内へうがねナゲ	腹縁部 腹内へうがねナゲ
67	2	17.9	へうがね 赤線ナゲ 腹縁部 腹内へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	腹	赤紫	赤紫	SD-4	腹縁部 腹内へうがねナゲ	腹縁部 腹内へうがねナゲ
68	11	17.9	三葉草 6ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
69	18	17.9	三葉草 4ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
70	8	17.9	水筒の8ヶ所 赤線ナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
71	17	18.5	内へうがねナゲ 外へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
72	10	14.2	内腹毛出ナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
73	8	15.9	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
74	28	14.4	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
75	28	14.4	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
76	25	14.8	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
77	4	14.8	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
78	30	14.4	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
79	29	11.0	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
80	1	8.7	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
81	21	12.5	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
82	2	7.6	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
83	2	7.6	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
84	25	10.7	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
85	11	8.2	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
86	25	14.2	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
87	21	5.1	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
88	1	4.5	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
89	28	3	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
90	14	2.5	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
91	45	5	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
92	8	4.6	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
93	17	4.6	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
94	7	4.6	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
95	6	4.6	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒
96	2	4.6	三葉草 8ヶ所 葉の裏へうがねナゲ	赤分粒、石灰質少	赤分粒	赤紫	赤紫	SD-4	赤分粒	赤分粒

第5表 弥生時代の後期から古墳時代前期の編年表

畿内		東海	北陸	関東	北信	安源寺	文化内容				
寺沢 1986	石野関川 1976	加納 1986	谷内尾 1983		笹沢 1984	1987					
期	大別様式	細別様式	様式	様式	様式	様式					
1	庄内様式	庄内0 縦向1式 (曲川式)	青道	法仏Ⅱ式	箱清水式土器	Ⅲ期	SB12 塗彩土器の盛行 外來系土器の出現				
2		庄内1 縦向2式 (庄内1式)	穴山式新	月影Ⅰ式							
8		庄内2	古元屋敷式新	月影Ⅱ式							
4		庄内3 縦向3式 (庄内2式)						五領期古段階	土師一期 御屋敷Y1号住 四ツ屋9号住 牟礼バイパス A2号住 仰町2.3.4号住 松本弘法山古墳	Ⅳ期	SD2 S字甕輸入 東西の土器の交流 古墳築造始まる
5	布留Ⅰ様式	布留0	石塚	古府クルビ式	土師二期	Ⅴ期	SD5 SB9 安源寺北陸系 土器主流 玉作りの盛行				
6		布留1 縦向4式 (布留1式)						高島式	灰塚H1住 五輪堂14住 御屋敷H19号 安源寺H・A号址 後沖4.16住 小島沖遺跡		
7		布留2						+	+	土師三期	Ⅵ期
8	布留3 縦向5式 (布留2式)	和泉式	城ノ内第一様式 下宇木B遺跡 駒沢新町8号祭祀址 須多ヶ峯2号住	Ⅶ期	集落沖積地へ 祭祀遺跡出現 古墳築造盛行						
9	布留4 布留4式					新井大ワフ祭祀址 栗岡Ⅰ・Ⅱ号住 城ノ内B・D801号12号 生仁H-18号住	Ⅷ期				
10	布留5 縦向6式 (布留3式)										
11	布留6 直続様式										

弥生時代後期から古墳前期時代の編年（試案）



1. 安源寺遺跡全景 安源寺城址方面より



2. 遺構 SD2



3. 遺構 SD8



1. SD2 甕出土状態



2. SD2 台付甕出土状態



3. SD2 小形甕出土状態



4. 手焙り形土器 (SD2)



6. 羽口 (A-2-5)



5. 同上



1. SD 6



2. (BY-1)



3. SD 5



4. SD 5



5. 同上



6. SD 2



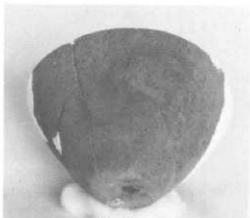
1. SD5



2. SD6



3. SD2



4. 同上



5. 同上



6. SD5



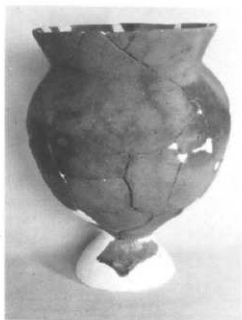
2. SD 2



1. SD 2



3. SD 8



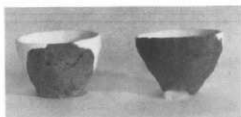
4. 同上



5. SB 9



SD 2



SB 6

SD 2



同上



SD 6



同上



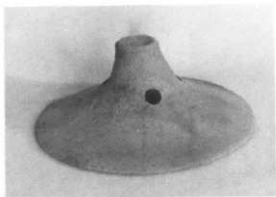
同上



1. SD 5



2. SD 9



3. SD 5



4. 同上



5. 同上



1. (B五表)



2. SD5



3. SD2



4. SD1



5. SD2



6. SD5



7. SD5



8. SD2



1. SD 2



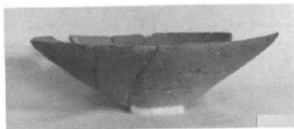
2. SD 7



3. SB 19



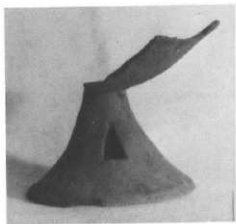
4. SD 6



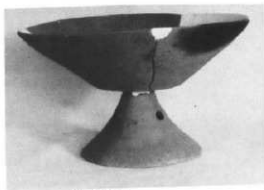
5. 同上



6. SD 2



7. 同上



8. SD 6



9. SD 1



10. 同上

第9図版 裝飾器台形・器台形・高坏形土器



1. SD7



2. SD5 付近



3. SD9



4. SD2



5. SB12 付近



6. 同上



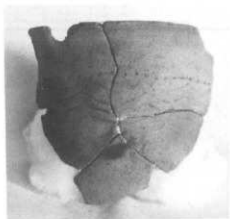
7. SK5



8. SB13



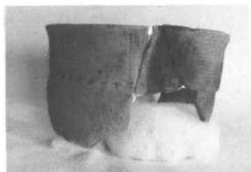
9. SB15



1. SK 6



2. SB 20



3. SD 8



4. SD 5



5. 同上



6. SD 9

中野市安源寺遺跡発掘調査報告

安 源 寺

昭和62年8月15日 印刷

昭和62年8月20日 発行

発行 中野市教育委員会
長野県中野市三好町1-8-19

印刷 カナイ美術印刷
長野県中野市中央2-2-2
